
日本ロシア文学会
第 75 回大会資料集

2025 年 10 月 25 日（土）～10 月 26 日（日）
東京大学（駒場 I キャンパス）

日本ロシア文学会

第 75 回（2025 年度）定例総会・研究発表会は、来たる 10 月 25 日（土）、26 日（日）の両日、東京大学（駒場 I キャンパス）にて、対面形式で開催されます。ハイフレックス方式は実施いたしませんので、ご了承ください。研究発表会では、31 件の個別発表（A, B, C）、2 件のワークショップ（W）が設けられます。ふるってご参加ください。

なお、配布資料類は Microsoft OneDrive からダウンロードが可能です。OneDrive のリンクについては、後日ロシア文学会ホームページ（<http://yaar.jpn.org/>）及び、学会員メーリングリストによりご連絡いたします。

ご参加予定の方は、以下の URL または QR コードから、Microsoft Forms のアンケートに入ってください、10 月 11 日（土）までに参加登録を行ってください。（ネームカードの準備、並びに懇親会の人数把握のため、できる限りアンケートへのご協力をお願いいたします。）

<https://forms.office.com/r/hQ40tc5aJz>

対面参加事前申込用 Microsoft Forms の QR コード



日本ロシア文学会 2025 年度定例総会・研究発表会（東京大学・駒場）タイムテーブル

10月25日（土）				
開会式 9:10-9:20 第1会場（K213 教室）				
		第1会場 （K213 教室）	第2会場 （K211 教室）	第3会場 （K214 教室）
研究発表・ワーク ショップ	9:25-10:00	ブロック① A	ブロック② A	ブロック③ W (9:25-11:55)
	10:00-10:35			
	10:35-10:45	休憩		
	10:45-11:20	ブロック④ A	ブロック⑤ A	
	11:20-11:55			
昼食	11:55-13:10	昼食（MM ホール）／理事会（K011 教室）		
研究発表	13:10-13:45	ブロック⑥ A	ブロック⑦ B	ブロック⑧ C/A
	13:45-14:20			
	14:20-14:55			
休憩	14:55-15:05			
大賞受賞記念講演	15:05-16:05	K011 教室		
定例総会	16:10-18:10	K011 教室		
懇親会	18:30-20:30	MM ホール		
10月26日（日）				
		第1会場 （K213 教室）	第2会場 （K211 教室）	第3会場 （K214 教室）
研究発表	9:15-9:50	ブロック⑨ A/C	ブロック⑩ B	ブロック⑪ C
	9:50-10:25			
休憩	10:25-10:35			
研究発表	10:35-11:10	ブロック⑫ A	ブロック⑬ C	ブロック⑭ C
	11:10-11:45			
昼食	11:45-13:00	昼食（MM ホール）／各種委員会		
研究発表・ワーク ショップ	13:00-13:35	ブロック⑮ W (13:00-15:00)	ブロック⑯ A	
	13:35-14:10			
	14:10-15:00			

〈受付〉21 KOMCEE East 2階

〈控室、書籍等展示〉K212 教室

プレシンポジウム

ロシア語という言語を考える
—その言語的特徴と歴史、社会との関わりをめぐって—

日時：2025年10月24日（金）18：45～20：50（対面のみ）

場所：東京大学駒場 I キャンパス 21 KOMCEE West 地下1階レクチャーホール

一般公開・入場無料

（本シンポジウムは後日のオンライン配信の予定はありません）

人間の最も基本的なコミュニケーション手段である言語は、たんなる道具にとどまらない文化であり、歴史をもち、ときには争いの原因ともなります。ロシア語をめぐる問題がしばしば社会的な関心の対象となるウクライナ侵攻以降の文脈も踏まえつつ、ロシア語について、その言語的特徴、歴史的な形成過程、ロシア国家の内外における社会的な位置づけといった様々な角度から、専門家たちがアプローチする一般に開かれたイベントです。ロシア語を勉強中の学生のみなさんなど、幅広い聴衆を歓迎します。

- 金子百合子「動作をどのように切り取って見せるか—ロシア語のアスペクトの魅力と沼—」

神戸市外国語大学ロシア学科教授。専門は現代ロシア語学、日露対照言語学。著書に『〈限界〉志向のロシア語と〈安定〉志向の日本語』（ひつじ書房）、共訳書に Yu.マスコフ『アスペクト論』（同上）。NHK ラジオ「まいにちロシア語」（応用編）2023 年度後期講師。

- 丸山由紀子「ロシア語、その歴史的歩み—15 世紀を中心に—」

東京大学教養学部非常勤講師。専門はロシア語史、スラヴ文献学。主要論文に К вопросу о распределении форм двойственного числа в русских житийных памятниках начала XV в. (на материале «Жития Стефана Пермского» и «Жития Сергия Радонежского») (15 世紀初頭のロシア聖者伝文献における双数形の分布について（『ペルミのステファン伝』『ラドネシのセルギイ伝』を資料として）, *Русский язык в научном освещении*, №21, М., 2011, pp. 162-188.

- ダツェンコ・イーホル「ポスト社会主義期・ウクライナ地方部における二言語状況」

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 特任助教。ウクライナのポルタワ地方出身。ウクライナ語史、歴史社会言語学、東スラヴ諸言語標準語形成の研究者。単著：『ウクライナ語場所副詞の形成史』（ウクライナ語で）Burago 出版社（キーウ）2014 年、論文：「東方典礼におけるウクライナ語——教会スラヴ語と口語の間」『スラヴ学論集』第 28 号（2025 年）他。

- 櫻間瑞希「戦時下で「言語を選択する」ことの意味を考える—移動したタタール人の例から—」

大阪大学大学院人文学研究科講師。主な専門は現代タタール・ディアスポラ社会におけることばと文化を中心とした言語社会学・文化人類学的研究。主要論文に「多中心的真正性の交渉：ウズベキスタンのタタール人コミュニティにおける言語・文化継承の動態」『言語政策』21: 1-20（2025 年）など。

司会：鳥山祐介（東京大学）

第1日研究発表 10月25日(土)

ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
第1会場(K213 教室)				
ブロック① 10月25日 9:25-10:35	A01	飯濱 碧輝 ИИХАМА Аоки	ルイレーエフの連作『ドゥーマ集』における悲劇的葛藤:デカブリストの理想の道徳的側面をめぐって Трагический конфликт в поэтическом цикле «Думы» К. Ф. Рыльева: к моральной стороне идеала декабриста	金沢 友緒 三浦 清美
	A02	井上 幸義 ИНОУЭ Юкиёси	チュツチェフの詩«Умом – Россию не понять...» (1866):ロストフ主教デミートリイの著作『人間における神のかたどりと似姿に関する考察』(1707)の引喩として Стихотворение Ф. И. Тютчева «Умом – Россию не понять...» (1866) как аллюзия на сочинение Дмитрия Ростовского «Разсуждение о образѣ Божии и подобии въ челоуѣцѣхъ» (1707)	
ブロック④ 10月25日 10:45-11:55	A05	ЧИАН Чиех-хан	Трагикомизм в драме Леонида Андреева «Жизнь Человека»	八木 君人 澤 直哉
	A06	李 博聞 LI Bowen	アンネンスキーの存在論的詩学:「境界」の可視性と「アポロンの悦び」をめぐって Онтологическая поэтика И. Анненского: видимость «граней» и «Аполлоновская радость»	
ブロック⑥ 10月25日 13:10-14:55	A09	福井 祐生 ФУКУИ Юки	天才からの出立:キレーエフスキーの前期著作群に見る知の主体の変化 Уход от гениальности: перемена гносеологического субъекта в ранних работах И. В. Киреевского	下里 俊行 齋須 直人
	A10	ИЮДИН Даниил Андреевич	Полемика о славянофилах в «Гражданине» Достоевского	
	A11	ЦЗУ Чуньмин	«Русская идея» Ф. Достоевского и ее значение в истории развития русской мысли	
第2会場(K211 教室)				
ブロック② 10月25日 9:25-10:35	A03	ЯНЬ Дин-цзя	Орнитологические мотивы в поэзии Велимира Хлебникова	武田 昭文 斉藤 毅
	A04	СЮН Цзун-Хуэй (Серафима)	Звездный ужас — расшифровка акмеизма	
ブロック⑤ 10月25日 10:45-11:55	A07	町田 航大 МАТИДА Кодай	ドストエフスキー『作家の日記』におけるフェリエトン・ジャンルの変容:『ある人物』の半書簡(1873)を例に Преображение жанра фельетона в «Дневнике писателя» Ф.М. Достоевского: на примере «Полписем «одного лица»» (1873)	番場 俊 越野 剛
	A08	БУЧНЕВА Дарья Дмитриевна	Современные способы решения проблем атрибуции в «Гражданине» Достоевского (1873–1874)	
ブロック⑦ 10月25日 13:10-14:55	B01	光井 明日香 МИЦУИ Асука	現代ロシア語における女性を指示する名詞の使用をめぐって Об использовании имен существительных, обозначающих лиц женского пола, в современном русском языке	阿出川 修嘉 秋山 真一
	B02	宮内 拓也 МИЯУТИ Такуя	ロシア語における名詞の(不)加算性と有界性について:可算名詞化接辞 -ин/-инк-に注目して О (не)исчисляемости и ограниченности существительных в русском языке: с особым вниманием к сингулятивным суффиксам -ин/-инк-	
	B03	金子 百合子 KANEKO Yuriko	ロシア語と日本語の動詞アスペクトに名詞ー動詞の概念的アナロジーを探索 Exploring Noun–Verb Conceptual Analogies in Russian and Japanese Verbal Aspect	
第3会場(K214 教室)				
ブロック③ 10月25日 9:25-11:55	W01	井上 道義 INOUE Michiyoshi 荒井 英治 ARAI Eiji 一柳 富美子 HITOTSUYANAGI Fumiko	芸術創造と芸術研究の理想的な協働を求めて:ショスタコーヴィチの場合——没後50周年、生誕120周年に寄せて—— Seeking the Ideal Collaboration Between Artistic Creation and Artistic Research: The Case of Shostakovich —Commemorating the 50th Anniversary of His Death and the 120th Anniversary of His Birth	山本 明尚 伊東 一郎 (コメンテーター)

ブロック⑧ 10月25日 13:10-14:55	C01	村山 久美子 MURAYAMA Kumiko	ショスタコーヴィチの1930年代のバレエへの過酷な非難に関する一考察 Observations on Severe Criticism of Shostakovich's Ballets in the 1930s	梅津 紀雄 松下 隆志
	C02	浜渦 理起 ХАМАУДЗУ Рики	スターリン期ソ連アニメーションにおける運動する植物 Движущиеся растения в советской анимации сталинского времени	
	A12	小嶋 冴 KOJIMA Sae	リュドミラ・ウリツカヤ作品『子供時代45-53』におけるスターリン時代の記憶 Память о сталинской эпохе в произведении Л.Е. Улицкой «Детство 45-53»	

第11回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月25日(土)15:05-16:05 K011教室

受賞講演者	講演題目
沼野 恭子 НУМАНО Кёко	「あなたを好きになってしまった」——時空を超える〈応答〉としての文学 “Я полюбила вас”: Литература как «отклик» сквозь пространство и время

第2日研究発表 10月26日(日)

ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
第1会場(K213教室)				
ブロック⑨ 10月26日 9:15-10:25	A13	山本 悠介 ЯМАМОТО Юсуке	リムスキー=コルサコフのいわゆる「汎神論」について О так называемом «пантеизме» Римского-Корсакова	河村 彩 本田 晃子
	C03	鈴木 佑也 SUZUKI Yuya	フルシチョフ期におけるソヴィエト宮殿競技設計に見る記念碑性の構想と変容——1957-1959年の設計案に基づく空間的分析 The Conception and Transformation of Monumentality in the Khrushchev-Era Architectural Competitions for the Palace of the Soviets: A Spatial Analysis Based on Proposals from 1957-1959	
ブロック⑫ 10月26日 10:35-11:45	A14	林 ゆかり ХАЯСИ Юкари	「事物」へのまなざし:1920年代後期のシクロフスキーの映画論をめぐって О «вещи» в кинотеории В. Шкловского во второй половине 1920-х годов	佐藤 千登勢 前田 和泉
	A15	金丸 駿 КАНЭМАРУ Сюн	ザボロツキイとトゥイニャーノフ:パロディの問題をめぐって Заболоцкий и Тынянов: к проблеме пародии	
ブロック⑮ 10月26日 13:00-15:00	W02	伊藤 愉 ITO Masaru 梶山 祐治 KAJIYAMA Yuji 高橋 沙奈美 TAKAHASHI Sanami 立石 洋子 TATEISHI Yoko 奈倉 有里 NAGURA Yuri	プーチン体制下におけるロシア文化 Russian Culture Under the Putin Regime	八木 君人
第2会場(K211教室)				
ブロック⑩ 10月26日 9:15-10:25	B04	渡部 直也 БАТАБЕ Наоя	ウクライナ語における/в/の音韻表示 Фонологическая репрезентация украинского согласного /в/	ダツエンコ イー ホル 岡野 要
	B05	池澤 匠 IKEZAWA Takumi	「穏やかなウクライナ化」とは何か:ウクライナ語の普及に関する言説の分析 Understanding “Gentle Ukrainization”: An Analysis of Discourses on the Promotion of the Ukrainian Language	

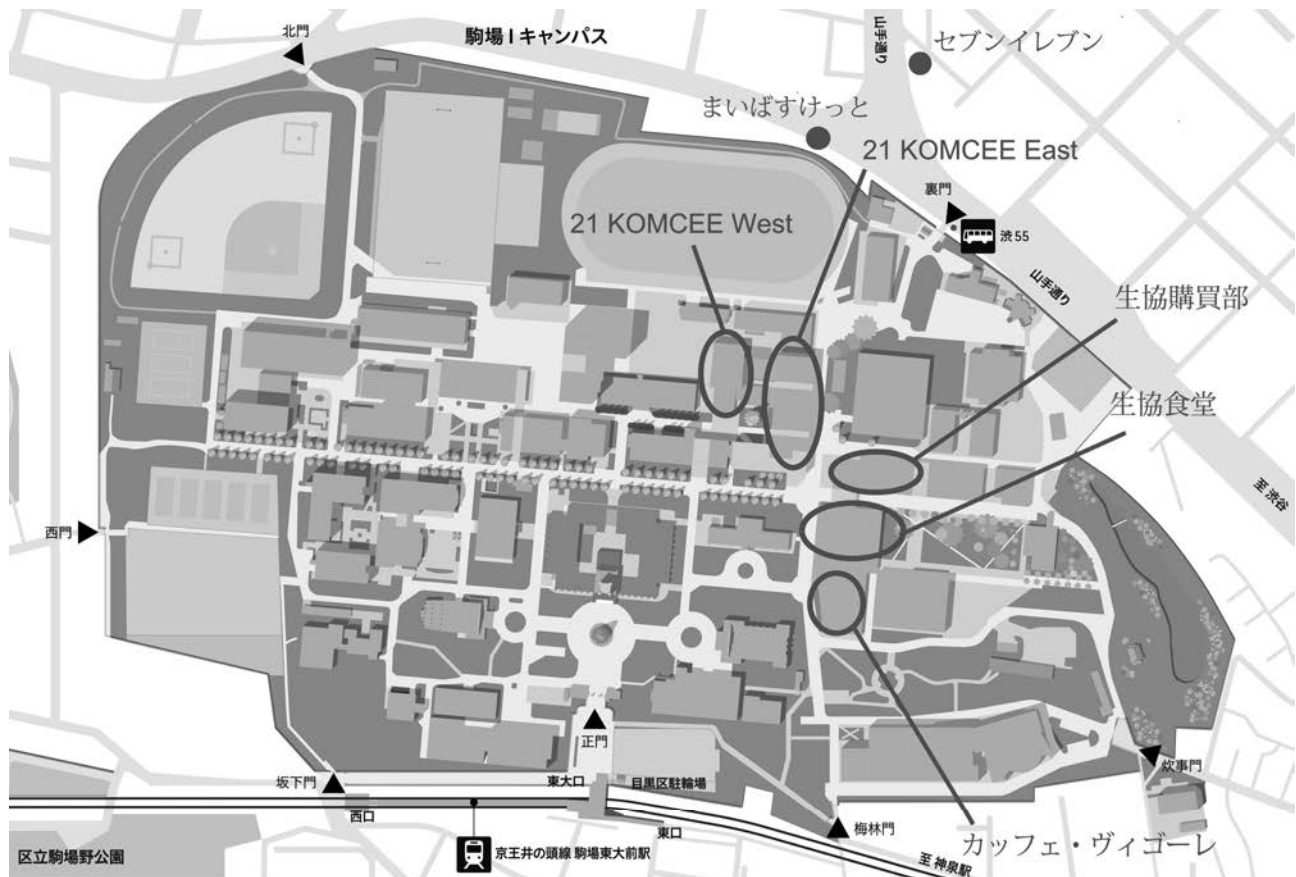
ブロック⑬ 10月26日 10:35-11:45	C06	横山 綾香 ЁКОЯМА Аяка	ユーリー・リュビーモフ演出『同志よ、信じよ……』(1973)にみる詩と観客の想像力の交錯 Переплетение поэзии и воображения зрителя в спектакле Юрия Любимова «Товарищ, верь…» (1973)	楯岡 求美 梶山 祐治
	C07	衛藤 萌子 ЭТО Мозго	キーラ・ムラートワの映画作品と人間学 Фильмы Киры Муратовой и антропология	
ブロック⑬ 10月26日 13:00-14:10	A16	山路 明日太 ЯМАДЗИ Асута	レールモントフの日付を題した抒情詩群 Дневниковые стихотворения Лермонтова	高橋 知之 三好 俊介
	A17	岩間 成美 ИВАМА Наруми	パトウインスキー「秋」におけるジャンルの問題 Проблема жанра в «Осени» Е. А. Баратынского	
第3会場 (K214 教室)				
ブロック⑪ 10月26日 9:15-10:25	C04	藤原 潤子 FUJIWARA Junko	アルファベット本に見る現代ロシアの愛国教育 Патриотическое воспитание в современной России через азбуки	溝渕 園子 松枝 佳奈
	C05	南平 かおり НАМПЭЙ Каори	片上伸と文芸教育論——ロシア留学で見聞したことは日本の児童文化の世界でどのようにいかされたか—— Нобуру Катаками и теория литературного образования: как опыт учебы в России был применен в японской детской культуре	
ブロック⑭ 10月26日 10:35-11:45	C08	宮崎 衣澄 МИЯДЗАКИ Идзуми	東京復活大聖堂のイコノスタス Иконостас в Соборе Воскресения Христова в Токио	高橋 沙奈美 熊野谷 葉子
	C09	柚木 かおり YUNOKI-OIE Kaori	見えざるソ連遺産とウクライナ・アイデンティティ: 伝統撥弦楽器コブザを事例として The Invisible Soviet Legacy and Ukrainian Identity: The Case of the Traditional Plucked String Instrument <i>Kobza</i>	

【会場案内】

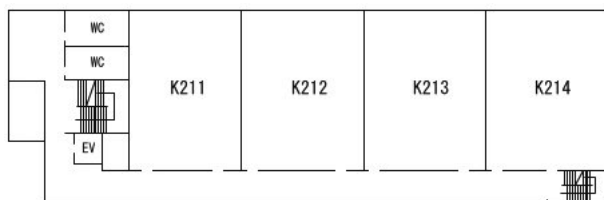
21 Komaba Center for Educational Excellence (21 KOMCEE)

※研究発表会場・控室・書籍展示場（K211～K214 教室・2 階）と大賞記念講演・総会会場（K011 教室・地下1 階）は 21 KOMCEE East に、プレシンポ会場（レクチャーホール）および懇親会場・昼休憩所（MM ホール）は 21 KOMCEE West の地下1 階にあります。21 KOMCEE East と West はそれぞれ独立しており、両者のあいだを建物内で行き来することは地下1 階の通路でのみ可能です。玄関入口が複数あり、わかりにくい設計になっておりますのでお気をつけください。

東京大学駒場 I キャンパスマップ

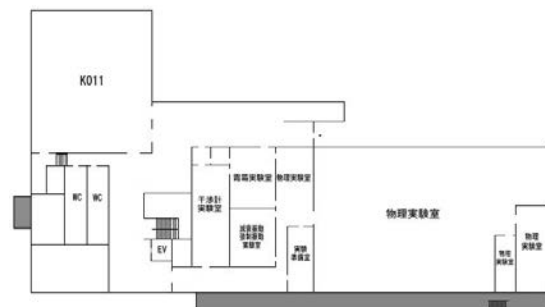


研究発表会場：21 KOMCEE East 2 階



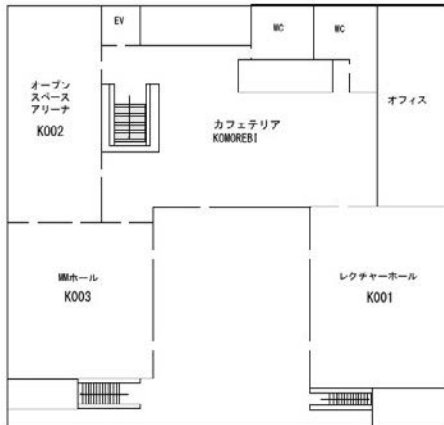
K211（第2会場）：ブロック②⑤⑦⑩⑬⑯
K212：控室、書籍等展示
K213（第1会場）：開会式、ブロック①④⑥⑨⑫⑮
K214（第3会場）：ブロック③⑧⑪⑭

講演・総会会場：21 KOMCEE East 地下1 階



K011：大賞記念講演、定例総会

プレシンポ・懇親会等会場：21 KOMCEE West 地下1階



レクチャーホール (K001)：プレシンポ
MMホール (K003)：懇親会、昼休憩所

【アクセス】

京王井の頭線・駒場東大前駅より徒歩0分です。東口改札から出て正門に進んでください。お車でのご来場はできません。

【宿泊・昼食その他】

- ・ 宿泊先は各自ご手配ください。
- ・ キャンパス内の施設のうち、生協購買部・生協食堂は10月25日（土）11:00-14:00のみ営業しています。「カフェ・ヴィゴレー」は10月25日（土）・26日（日）とも9:00-19:00営業しています。キャンパス外では、裏門を出た付近にスーパー「まいばすけっと」やコンビニ「セブンイレブン」があります（キャンパスマップ参照）。
- ・ 21 KOMCEE内では、MMホール（KOMCEE West 地下1階）以外の場所での食事は禁止となっております。水分補給のための飲み物の持ち込みは差し支えありませんが、控室等での飲み物や茶菓子の提供はございませんので、予めご了承ください。10月25日（土）・26日（日）とも12:00-13:00はMMホールを使えますので、食事をされる場合はそちらでお願いします。

懇親会のお知らせ（Банкет）

日時：10月25日（土）18:30-20:30 (25 октября, сб, 18:30-20:30)

場所：21 KOMCEE West 地下1階 MMホール (MM Hall, B1F of 21 KOMCEE West)

常勤職（任期付・学振PD等含む）：8,000円 (для штатных преподавателей – 8,000 иен)

非常勤職等：4,000円 (для внештатных преподавателей – 4,000 иен)

大学院生：4,000円 (для аспирантов – 4,000 иен)

支払い：当日受付にて・現金のみ（なるべくお釣りの出ないようご用意ください）

（Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет）

☆ご出欠のお知らせを10月11日（土）までにMicrosoft Formsのアンケートにてご回答ください

（本資料集3頁参照）。この後でも参加登録は可能ですが、できるだけ締切までに登録いただけますと助かります。食品アレルギー対応メニューやベジタリアンメニューをご希望の方にはご対応も可能ですので、10月11日までにアンケートにてお申し込みください。

日本ロシア文学会第75回研究発表会 報告要旨集

- A01 飯濱 碧輝 ルイレエフの連作『ドゥーマ集』における悲劇的葛藤:デカプリストの理想の道徳的側面をめぐって
- A02 井上 幸義 チュツチェフの詩«Умом – Россию не понять...» (1866):ロストフ主教ディミートリイの著作『人間における神のかたどりと似姿に関する考察』(1707)の引喩として
- A03 ЯНЬ Дин-цзя Орнитологические мотивы в поэзии Велимира Хлебникова
- A04 СЮН Цзун-Хуэй Звездный ужас — расшифровка акмеизма
(Серафима)
- A05 ЧИАН Чнех-хан Трагикомизм в драме Леонида Андреева «Жизнь Человека»
- A06 李 博聞 アンネンスキーの存在論的詩学:「境界」の可視性と「アポロ的な悦び」をめぐって
- A07 町田 航大 ドストエフスキー『作家の日記』におけるフェリエトン・ジャンルの変容:『ある人物』の半書簡(1873)を例に
- A08 БУЧНЕВА Дарья Современные способы решения проблем атрибуции в «Гражданине» Достоевского (1873–1874)
- A09 福井 祐生 天才からの出立:キレーエフスキーの前期著作群に見る知の主体の変化
- A10 ИЮДИН Даниил Полемика о славянофилах в «Гражданине» Достоевского
- A11 ЦЗУ Чуньмин «Русская идея» Ф. Достоевского и ее значение в истории развития русской мысли
- A12 小嶋 冴 リュドミラ・ウリツカヤ作品『子供時代 45–53』におけるスターリン時代の記憶
- A13 山本 悠介 リムスキー＝コルサコフのいわゆる「汎神論」について
- A14 林 ゆかり 「事物」へのまなざし:1920年代後期のシクロフスキーの映画論をめぐって
- A15 金丸 駿 ザボロツキイとトゥイニャーノフ:パロディの問題をめぐって
- A16 山路 明日太 レールモントフの日付を題した抒情詩群
- A17 岩間 成美 バラトウインスキー「秋」におけるジャンルの問題
- B01 光井 明日香 現代ロシア語における女性を指示する名詞の使用をめぐって
- B02 宮内 拓也 ロシア語における名詞の(不)加算性と有界性について:可算名詞化接辞 -ин/-инк-に注目して
- B03 金子 百合子 ロシア語と日本語の動詞アスペクトに名詞ー動詞の概念的アナロジーを探索
- B04 渡部 直也 ウクライナ語における/в/の音韻表示
- B05 池澤 匠 「穏やかなウクライナ化」とは何か:ウクライナ語の普及に関する言説の分析
- C01 村山 久美子 ショスタコーヴィチの1930年代のバレエへの過酷な非難に関する一考察
- C02 浜渦 理起 スターリン期ソ連アニメーションにおける運動する植物
- C03 鈴木 佑也 フルシチョフ期におけるソヴィエト宮殿競技設計に見る記念碑性の構想と変容——1957–1959年の設計案に基づく空間的分析
- C04 藤原 潤子 アルファベット本に見る現代ロシアの愛国教育
- C05 南平 かおり 片上伸と文芸教育論——ロシア留学で見聞したことは日本の児童文化の世界でどのようにいかされたか——
- C06 横山 綾香 ユーリー・リュビエモフ演出『同志よ、信じよ……』(1973)にみる詩と観客の想像力の交錯
- C07 衛藤 萌子 キーラ・ムラートワの映画作品と人間学
- C08 宮崎 衣澄 東京復活大聖堂のイコノスタス
- C09 柚木 かおり 見えざるソ連遺産とウクライナ・アイデンティティ:伝統撥弦楽器コブザを事例として
- W01 芸術創造と芸術研究の理想的な協働を求めて:ショスタコーヴィチの場合——没後50周年、生誕120周年に寄せて——(井上道義・荒井英治・一柳富美子・山本明尚・伊東一郎)
- W02 プーチン体制下におけるロシア文化(伊藤愉・梶山祐治・高橋沙奈美・立石洋子・奈倉有里・八木君人)

Abstracts of Research Papers Accepted for the 75th Annual Conference of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

A01	ИИХАМА Аоки	Трагический конфликт в поэтическом цикле «Думы» К. Ф. Рылеева: к моральной стороне идеала декабриста
A02	ИНОУЭ Юкиёси	Стихотворение Ф. И. Тютчева «Умом – Россию не понять...» (1866) как аллюзия на сочинение Димитрия Ростовского «Разсуждение о образѣ Божии и подобии въ чловѣцѣ» (1707)
A03	ЯНЬ Дин-цзя	Орнитологические мотивы в поэзии Велимира Хлебникова
A04	СЮН Цзун-Хуэй (Серафима)	Звездный ужас — расшифровка акмеизма
A05	ЧИАН Чиех-хан	Трагикомизм в драме Леонида Андреева «Жизнь Человека»
A06	LI Bowen	Онтологическая поэтика И. Анненского: видимость «граней» и «Аполлоновская радость»
A07	МАТИДА Кодай	Преображение жанра фельетона в «Дневнике писателя» Ф.М. Достоевского: на примере «Полписем «одного лица»» (1873)
A08	БУЧНЕВА Дарья	Современные способы решения проблем атрибуции в «Гражданине» Достоевского (1873–1874)
A09	ФУКУИ Юки	Уход от гениальности: перемена гносеологического субъекта в ранних работах И. В. Киреевского
A10	ИЮДИН Даниил	Полемика о славянофилах в «Гражданине» Достоевского
A11	ЦЗУ Чуньмин	«Русская идея» Ф. Достоевского и ее значение в истории развития русской мысли
A12	КОЛМА Sae	Память о сталинской эпохе в произведении Л.Е. Улицкой «Детство 45-53»
A13	ЯМАМОТО Юсуке	О так называемом «пантеизме» Римского-Корсакова
A14	ХАЯСИ Юкари	О «вещи» в кинотеории В. Шкловского во второй половине 1920-х годов
A15	КАНЭМАРУ Сюн	Заболоцкий и Тынянов: к проблеме пародии
A16	ЯМАДЗИ Асута	Дневниковые стихотворения Лермонтова
A17	ИВАМА Наруми	Проблема жанра в «Осени» Е. А. Баратынского
B01	МИЦУИ Асука	Об использовании имен существительных, обозначающих лиц женского пола, в современном русском языке
B02	МИЯУТИ Такуя	О (не)исчисляемости и ограниченности существительных в русском языке: с особым вниманием к сингулятивным суффиксам -ин/-инк-
B03	KANEKO Yuriko	Exploring Noun–Verb Conceptual Analogies in Russian and Japanese Verbal Aspect
B04	БАТАБЕ Наоя	Фонологическая репрезентация украинского согласного /в/
B05	IKEZAWA Takumi	Understanding “Gentle Ukrainization”: An Analysis of Discourses on the Promotion of the Ukrainian Language
C01	MURAYAMA Kumiko	Observations on Severe Criticism of Shostakovich’s Ballets in the 1930s
C02	ХАМАУДЗУ Рики	Движущиеся растения в советской анимации сталинского времени
C03	SUZUKI Yuya	The Conception and Transformation of Monumentality in the Khrushchev-Era Architectural Competitions for the Palace of the Soviets: A Spatial Analysis Based on Proposals from 1957–1959
C04	FUJIWARA Junko	Патриотическое воспитание в современной России через азбуки
C05	НАМПЭЙ Каори	Нобуру Катаками и теория литературного образования: как опыт учебы в России был применен в японской детской культуре
C06	ЁКОЯМА Аяка	Переплетение поэзии и воображения зрителя в спектакле Юрия Любимова «Товарищ, верь...» (1973)
C07	ЭТО Мозко	Фильмы Киры Муратовой и антропология
C08	МИЯДЗАКИ Идзуми	Иконостас в Соборе Воскресения Христова в Токио
C09	YUNOKI-OIE Kaori	The Invisible Soviet Legacy and Ukrainian Identity: The Case of the Traditional Plucked String Instrument <i>Kobza</i>
W01	Seeking the Ideal Collaboration Between Artistic Creation and Artistic Research: The Case of Shostakovich —Commemorating the 50th Anniversary of His Death and the 120th Anniversary of His Birth (INOUE Michiyoshi, ARAI Eiji, HITOTSUYANAGI Fumiko, YAMAMOTO Akihisa, ITO Ichiro)	
W02	Russian Culture Under the Putin Regime (ITO Masaru, KAJIYAMA Yui, TAKAHASHI Sanami, TATEISHI Yoko, NAGURA Yuri, YAGI Naoto)	

JASRL

October 2025

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for citation without the author's
agreement.

【A01】ルィレーエフの連作『ドゥーマ集』における悲劇的葛藤：デカブリストの理想の道徳的側面をめぐって

飯濱 碧輝

本発表の目的はデカブリスト詩人ルィレーエフの連作『ドゥーマ集』における市民の理想像の道徳的側面を明らかにすることである。この連作に登場する歴史上の人物たちは会戦や刑死に際して、また、自分の失政や夫の失政の回顧に際して同胞の自由と共通善を追求する。彼らは国家や民族の窮状を登場人物たちが自分自身の不幸と見なすことにより、自由と共通善の追求という市民的義務を内面化している。多くの研究者たちは『ドゥーマ集』で提示された義務が理性主義的な道徳論から離れ、感情の重視を伴っている点に注目してきたが、『ドゥーマ集』の登場人物たちによる義務の内面化を文学の道徳論的伝統の観点では論じてこなかった。このことはルィレーエフの抒情詩と道徳論の関係を曖昧にしており、さらには19世紀初頭のロシア詩における道徳論の意義の研究を困難にしている。

この課題に取り組むにあたり、本発表は『ドゥーマ集』における道徳的義務の内面化をロシアの古典主義悲劇における悲劇的葛藤に照らして考察する。最近の研究で指摘されているように、ロシアの古典主義悲劇においても道徳的義務が内面化され、有徳の人間の高潔な精神に結びつけられている。そこでは諸々の道徳的義務は常に、相容れない別の義務との葛藤の中に置かれており、祖国に対する義務の遂行ではなく、それを可能にする精神的資質が登場人物たちの徳を証明する。例えば、古典主義悲劇において処刑される際、有徳の人間は死の恐怖を退け、自らの勇敢さを強調する。一方、『ドゥーマ集』の登場人物たちは同胞の自由と共通善のために奮闘するのであり、相反する義務の間で苦悩し続けるわけではない。だが、『ドゥーマ集』で一貫して提示されるこの道徳的義務は夫婦の義務や臣民の義務などの他の道徳的義務、あるいは暴君や敵対勢力による抑圧と対立しており、自由と共通善そのものの重要性ではなく、それらを実現する勇敢さと寛容、忍耐の重要性が説かれ、讃えられる。

重要なのは、道徳的義務と精神的資質の連関が『ドゥーマ集』においては理性や感受性に基づく判断ではなく、意志に基づく行動に重点を置いていることである。先行研究が『ドゥーマ集』に見出してきた感情主義文学の特徴は道徳論を行動志向にすることに寄与しており、ルィレーエフの後年の抒情詩や手記の道徳的側面にも、同様の行動志向性が見られる。

(早稲田大学院生)

【A02】チュッチェフの詩「Умом – Россию не понять...» (1866)：ロストフ主教ディミートリイの著作『人間における神のかたどりと似姿に関する考察』(1707)の引喩として

井上 幸義

チュッチェフの「Умом – Россию не понять...」に直接影響を与えた作品に言及している先行研究は見当たらないが、本発表では、その可能性として、ロストフ主教ディミートリイ (1651-1709) の著作『人間における神のかたどりと似姿に関する考察』およびこの作品をディミートリイ自ら流用した2作品をとりあげる。これらは旧約聖書『創世記』1章26節の「神は言われた「по образу нашему (我々にかたどり)、и по подобию (我々に似せて)、人を造ろう」の意味を考察した論考で、元々4世紀のギリシア教父大バシレイオスが著した『創造の六日間』の17世紀教会スラヴ語訳テキストをディミートリイ自身が引用・加筆・考察したものである。チュッチェフの詩とディミートリイのテキストには形式(造格・否定形)・内容ともに顕著な類似性が認められる。

チュッチェフの詩：「Умом (頭 [知性]では) ロシアは理解できぬ。Аршином общим ((西欧と) 同じ物差しでは) 測れぬ。ロシアには особенная статья (独自固有の姿 [精神]が) あり、ロシアとは信じることしかできぬもの」。

ディミートリイの著作：「ТВОИМЪ УМОМЪ (自分の頭 [知性]で) 神を思い描いてはならぬ。神は [возрастомъ] ((人間と同じ) 年齢 [時間]の物差しでは) 測れぬ。не возмечтавши образа (神のかたどりを [魂]を思い描こうとしてはならぬ) (カッコ書きの [возрастомъ]はディミートリイ自身による加筆)。ディミートリイは神の образ「かたどり」とは「魂」であると説き、チュッチェフの詩の статья「姿」も「精神」を意味する。つまり、詩中の「ロシア」はそのまま「神」に置き換えることができ、このことは、詩人がロシアの精神性を西欧に対峙させるだけでなく、神になぞらえていることを示唆している。

さらに、詩人の母はディミートリイを深く崇敬し、自ら筆写したこの高名な主教に捧げる祈祷文が詩人の子孫たちに2018年まで代々受け継がれてきたことから、チュッチェフはディミートリイの著作に親しみ、引喩としてこの詩を著したと推測できる。本発表では、標記の詩とキリスト教を主題とするチュッチェフの2編の詩を比較検討し、これらの詩の関係、書かれた経緯・時代背景についても考察したい。

(上智大学)

**【A03】 Орнитологические мотивы в поэзии
Велимира Хлебникова**

ЯНЬ Дин-цзя

Как известно, отец Велимира Хлебникова, Владимир Алексеевич Хлебников, был знаменитым орнитологом и автором «Списка птиц Астраханского края». В своих трудах он подробно описывал повадки и места обитания птиц, что свидетельствует о глубоком знании орнитофауны. Интерес к орнитологии оказал влияние и на формирование научных и художественных интересов его сына. Виктор Хлебников прекрасно знает мир птиц, знаком с соответствующей научной литературой, и, будучи студентом Казанского университета, участвовал в полевых наблюдениях за птицами.

Орнитологические мотивы играют важную роль в поэтическом мире Хлебникова. Птицы в его творчестве выступают не только как элементы поэтического образа, но и как источники звукоподражания и лингвистических экспериментов. Поэт имитирует птичью речь, конструирует новые слова и ритмы, вдохновляясь пением птиц, создавая при этом свой «птичий язык». Кроме того, образы птиц приобретают символическую нагрузку: они ассоциируются со свободой, с полетом мысли, с переходом между мирами и зачастую с фигурой самого поэта.

Настоящий доклад посвящён анализу орнитологических образов в поэзии Хлебникова. Объектом рассмотрения являются такие произведения, как «Птичка в клетке» (1897), «На ветке ...» (1905-1906), «Кузнечик» (1908), «Там, где жили свиристели...» (1908), «Труба Гуль-муллы» (1921). Эти тексты охватывают весь хронологический спектр творчества поэта, что позволяет говорить о систематичности и концептуальной значимости птичьих мотивов в его художественном мире. Анализ этих образов в контексте футуристической поэтики и мифопоэтического мышления поэта может выявить их функциональную нагрузку и символические значения птиц в структуре его поэтической вселенной.

(Государственный Чжэнчжи университет)

**【A04】 Звездный ужас — расшифровка акмеизма
СЮН Цзун-Хуэй (Серафима)**

Данный доклад посвящен рассмотрению звездной темы в творчестве поэтов-акмеистов, выяснению исторического контекста этого кода в акмеизме и скрываемого за ним культурного значения.

Звездная тема проявляется в поэзии акмеистов начиная с антисимволистского периода, выражая их оппозицию чрезмерному тяготению символистов к трансцендентному миру и «непознаваемому». Звездная тема впоследствии стала особой формой «диалога» Николая Гумилева и Осипа Мандельштама, содержание которого указывает на тревогу и беспокойство по поводу культурного разрыва, социального противостояния и ненависти в послереволюционном российском обществе.

В 1930-е годы Мандельштам во время ссылки в Воронеж продолжает свою ненависть к звездам в «Стихах о неизвестном солдате». Анна Ахматова после долгого творческого молчания начала работу над «Реквиемом», в котором она развила звездную тему и присоединилась к своим соратникам по перу в «диалоге о звездном ужасе». С тех пор «звездный ужас» стал основным поэтическим кодом среди поэтов-акмеистов, обсуждающих террор тоталитаризма и трагедию русского народа.

«Звездный ужас» — закодированная тема в творчестве поэтов-акмеистов, а также код, ведущий к их зашифрованному диалогу. Расшифровка «звездного ужаса» — ключ к разгадке этого кода, который представляет собой тяжелое обвинение поэтов-акмеистов в жестоких преступлениях, вызванных чрезмерной властью, и трагедии массовой смерти человечества в 20 веке.

(Национальный тайваньский университет)

【A05】 Трагикомизм в драме Леонида Андреева
«Жизнь Человека»

ЧИАН Чиех-хан

Доклад посвящен трагикомической природе драмы Леонида Андреева «Жизнь Человека», которую можно назвать ключевым произведением писателя, наиболее полно воплощающим как его философский взгляд на «проклятые вопросы» бытия, так и его творческие искания в области драматургии.

Существенным для создания «Жизни Человека» является обращение Андреева к художественным приемам различных видов искусства. В работе прослеживается роль смеха и комического в контексте поисков писателем новой драматической формы. Важное место в этом плане занимает влияние творчества Ф. Гойи с его характерным гротескным видением мира и язвительной сатирой, направленной на изобличение пороков современного общества. Не менее значимыми оказываются традиция народного театра Петрушки и поэтика лубка, имеющие прямое отношение к выражению комического начала художественного мышления Андреева. В философском плане изучается определяющее влияние мировоззрения А. Шопенгауэра на идейную основу пьесы. Показательно, что андреевская идея об экзистенциальной иронии человеческой жизни непосредственно соотносится с шопенгауэровским представлением о существовании человека как трагедии в целом и комедии в частностях. Согласно этой концепции, человек лишен всякого достоинства и обречен исполнять роль «пошлого комедианта» в своего рода фарсе жизни, в котором трагическая бессмысленность проявляется в бесконечных комических ситуациях.

Именно в глубоком взаимопроникновении трагического и комического в «Жизни Человека» отражается взгляд Андреева на парадоксальную ситуацию существования человека. Подробно анализируется функция хоровых групп персонажей, тесно связанных с сатирической направленностью драмы. Особое внимание уделяется сцене бала, где шаржированное изображение действительности способствует созданию напряженного эмоционального эффекта. Также в работе анализируется явление гротескного смеха, в котором особенно ярко раскрывается трагическое столкновение человека с неумолимым роком.

(Государственный Чжэнчжи университет)

【A06】 アンネンスキーの存在論的詩学：「境界」の可視性と「アポロ的な悦び」をめぐる

李 博聞

ロシアの古典学者・詩人アンネンスキー (И. Ф. Анненский, 1855-1909) の詩がその語彙的な革新、ヘレニズムのロシア化、主体の身体化によってポスト象徴主義運動 (フレーブニコフ、マンデリシュタム、パステルナーク等) に深い影響を与えたことは、これまで先行研究によって指摘されてきたところだが、アンネンスキーはその詩学における存在論的思想によっても 20 世紀のロシア詩に大きな痕跡を残している。本発表は、アンネンスキーの詩で強調されている「境界」の視覚的特徴と、彼のニーチェ「ディオニソス論」批判を手掛かりに、従来の研究で見落とされてきたアンネンスキーの存在論的詩学を考察することで、20 世紀ロシア詩におけるアンネンスキーの詩学の水脈を探求することを目指すている。

アンネンスキーは、詩人として存在の「超越性」を鋭敏に捉え、身体と環境の隔たりを通じてその境界を画する一方、古典学者として人間の「具体性」に焦点を当て、知覚される印象の時代性を強調する。アンネンスキーにとって、超越的な「存在」は隠されているものではなく、光を浴びている「可視的」なものである。この可視性をもって、アンネンスキーはニーチェが唱える秘儀崇拜的な「ディオニソスの美学」を批判し、イデアと現実の連合となる「アポロンの美学」を強調している。「アポロ的な悦び」を通じて、詩人は時代の具体性を捉えることができ、神話の論理に従って古代の物語を演繹するのではなく、生活の論理に従って古代の日常を復権することができる。

本発表では、まずアンネンスキーの詩集『糸杉の匣』を取り上げ、彼の詩作における存在の「境界」の可視性を分析する。次に、アンネンスキーのノート「ニーチェに関する断片」を参照しながら、「境界」の光学的特性に基づき、アンネンスキーの「アポロン論」を論じる。最後に、彼の論文「現代フランス詩における古代神話」を踏まえて、アンネンスキーの詩学に内在するギリシア的核心を明らかにし、超越的存在と具体的人間を結びつける「光学的連合」を解明する。以上の分析を通じて、アンネンスキーが構想する現実と存在の「印象的」な有り様が明らかになり、象徴主義の「神秘化」の傾向から現実へ回帰する 1920 年代ロシア詩のパラダイム転換の原点を示唆することができる。

(京都大学院生)

【A07】ドストエフスキー『作家の日記』におけるフェリエトン・ジャンルの変容：「『ある人物』の半書簡」（1873）を例に

町田 航大

本発表は、フェリエトン（新聞の雑報欄、世相戯評）のジャンルがドストエフスキーの思想表現に果たした役割を、『作家の日記』所収の「『ある人物』の半書簡」（1873）というテキストを中心に検討するものである。ドストエフスキーは創作の初期から晩年に至るまでフェリエトンの作品を継続的に執筆しており、このジャンルの諸特徴——風俗の生理学的描写、軽妙なおしゃべりの語り口、話題の跳躍、自己言及性など——を摂取したことが、彼の小説および評論における文体や主題の形成に大きな影響を与えたとされている。

しかし、従来の研究は、ドストエフスキーの著作をフェリエトンの一般的特徴に当てはめて当ジャンルとの類似性を論じるか、あるいはフェリエトンを「現代の主要事項」と見なした作者自身の発言に注目するにとどまるものが多く、この作家の創作の中でフェリエトンが担っている役割に対する本格的な考察は未だ十分とはいえない。とりわけ注目すべきは、フェリエトンという形式をめぐるドストエフスキーの創作が、同時代の主要な言論人たちとの対話・論争という相互的文脈において立ち現れてくる点である。彼はフェリエトンの様式を模倣し、あるいは変奏する中で、常に他者の言説に対する応答として、あるいは挑発として、自身の立場を構築していた。

この観点から見ると、「『ある人物』の半書簡」は重要な事例となる。本作は、『市民』編集部に寄せられた書簡の断片を紹介する体裁を取りながら、実際にはドストエフスキー自身による創作であり、当時のリベラル派評論家による攻撃的なフェリエトンの語調を誇張的に再現しつつ、そうした言説の空疎さや政治的パフォーマンス性を戯画化している。書簡の架空の作者である「ある人物」を通して描き出されるフェリエトン作家像は、言論の無節度、自己目的化、信念の空白といった問題点を象徴的に体現している。同時に、その批判の矛先は単なる他者攻撃にとどまらず、作中においてドストエフスキー自身の思想的態度も客体化されることで、彼の思想表現が自己反省的に開かれてゆく運動として読むことが可能となる。

以上の分析を通じて、本発表は、『作家の日記』におけるフェリエトンの語り、同時代の公共的言説空間との緊張関係の中で展開された批評的実践であり、ジャンルの模倣と解体を通じて自他の言説態度を再編成する装置として機能していたことを明らかにしたい。

（早稲田大学院生）

【A08】Современные способы решения проблем атрибуции в «Гражданине» Достоевского (1873–1874)

БУЧНЕВА Дарья Дмитриевна

Вклад Достоевского в журналистику XIX века еще не до конца оценен, в том числе потому, что не все тексты писателя известны широкому кругу читателей. Уже после смерти Достоевского ближайшее окружение писателя предлагало в эдичионной практике не учитывать его анонимные и псевдонимные публикации. Вспоминая решение Достоевского не включать публицистические тексты в его «Полное собрание сочинений», издаваемое Ф. Т. Стелловским в 1865–1870-х гг., А. Г. Достоевская считала, что писатель не придавал им особого значения. Однако не стоит преуменьшать ценность этих публикаций, поскольку неизвестно, какое решение бы принял автор, издавая впоследствии свои труды. В период 1873–1874 гг. Достоевский занимал должность редактора еженедельника «Гражданин», где большой объем материалов публиковался анонимно или под псевдонимами. Это была редакционная политика издания. В филологической науке на протяжении долгих лет для установления автора текста использовались традиционные методы. Наличие документальных источников является наиболее объективным основанием для доказательства авторства. В XX веке многие атрибуции были основаны только на стилистической близости текстов в «Гражданине» с наследием Достоевского. Однако зачастую этот подход уводил исследователей в субъективизм. Спустя годы некоторые атрибуции удалось подтвердить подготовленными и опубликованными гонорарными ведомостями, эпистолярным наследием Достоевского и его корреспондентов, записными книжками и тетрадями писателя. Необходимо искать новые пути решения проблемы установления автора статей, обзоров, заметок и др. в «Гражданине», обращаясь к современным информационным технологиям. В настоящем докладе будут проанализированы результаты использования факторного анализа, методов машинного обучения, «Леса решений» на материале «Гражданина» Достоевского, рассмотрена их информативность и релевантность.

（Петрозаводский государственный университет）

【A09】天才からの出立：キレーエフスキーの前期著作群に見る知の主体の変化

福井 祐生

本発表は、イワン・キレーエフスキーの前期著作群（1834年まで）に注目し、知の主体をめぐる彼の思想の変化を検討し、その科学社会史的意義を考察しようとするものである。従来の研究においてキレーエフスキーの前期思想は、初期スラヴ主義の中心をなす後期思想へと向かう過渡的段階として扱われ、相対的に注目を集めづらい部分であった。キレーエフスキー研究においては、シリアのイサクをはじめとする東方教父の著作を承けた、晩年の「霊の全体性」の教説が中心に評価されてきた。前期思想は対照的に、「ロマン主義から教父思想へ」という解釈図式の中で、シェリング哲学を中心とするロマン主義の思想として概略的に把握される傾向にある。しかしながら、キレーエフスキーの前期思想を「ロマン主義」と一元的に規定することには大きな問題がある。キレーエフスキー研究の第一人者であるコンスタンチン・アントノフ（2006）は、後期キレーエフスキーのリーチノスチ論を重視しながらも、前期思想にも目を光らせ、それが 1) 文芸批評を中心とする「20年代半ばから30年代初頭：『哲学的美学』期」と、2) 思想自体により重きを置いた「1832年から1834年：『価値的』時期」に区別されるのではないかと示唆している。ただしアントノフは、著書の最後でこの区分を新たに導入するばかりであり、前期思想の変遷に十分な光を当てていない。そこで本発表は、前期キレーエフスキーの主要著作群を検討し、その経時的変化と同時代史的意義を考察する。特に、キレーエフスキーが「19世紀」（1832）以降の著作において、「天才」（гениальность）や「靈感」（вдохновение）という概念を否定的に扱うようになることに注目する。こうした立場は、「1827年の諸雑誌」（1827）や「1829年のロシア文学概況」（1830）の中で、国民文学の形成における「天才」の意義が認められていることと対照的である。本発表では、「19世紀」を形成するに至った、ヨーロッパ遊学（1830）におけるヘーゲルやシェリングらとの邂逅、プーシキンの影響や愛智会との距離感などを通して、この小さな転換の理由を明らかにすることを目指す。そして、この前期キレーエフスキーの思想的変化が当時の科学社会史的な文脈において持つ意義について考えたい。

（早稲田大学、日本学術振興会）

【A10】 Полемика о славянофилах в «Гражданине» Достоевского
ИЮДИН Даниил Андреевич

Славянофильство было одной из ключевых тем в редакционной политике еженедельника «Гражданин». Отношение к славянофильству определяло направление, каким было издание: консервативным или либеральным, петербургским или московским. «Гражданин» не декларировал себя славянофильским изданием, но его авторы положительно оценивали славянофильство и славянофилов, а сами западники считали «Гражданин» развитием литературной и политической программы журналов «Время», «Эпоха», «Заря». Позже в 1880-е годы Н. Страхов отнес эти издания к «петербургскому славянофильству». Насколько оправдана атрибуция почвенничества славянофильству?

О славянофильстве среди авторов «Гражданина» писали Ф. Достоевский, В. Мещерский, Т. Филиппов, М. Погодин, А. Порецкий, И. Некрасов, Н. Страхов, анонимные авторы и составители редакционных статей и рубрик. Авторы «Гражданина» рассматривали западников и славянофилов как широкое социальное и культурное явление, относя к славянофильству не только А. Хомякова, братьев И. и П. Киреевских и К. и И. Аксаковых, но и других московских славянофилов, и «старших» и «младших» (М. Погодина, В. Даля, А. Гильфердинга, профессоров Московского университета, авторов «Москвитянина» и славянофильских газет). Заметную роль в этом событии сыграла полемика Погодина, в которой он ставил вопросы, что есть славянофильство, кто были славянофилы и кого можно назвать славянофилами. В полемике М. Погодина с Пыпиным «Гражданин», а это прежде всего Достоевский, расширил круг славянофилов, включив в него десятки славных имен поэтов и писателей, философов и критиков, историков и филологов, которых формально не называли, но их по праву можно назвать славянофилами, как, например, Пушкина и Тютчева.

Благодаря сложившемуся союзу славянофилов и почвенников в «Гражданине» Достоевского возникла новая концепция почвенничества как петербургского славянофильства, за счет беспрецедентного расширения круга славянофилов открылись перспективы несостоявшегося направления русской поэзии и политики.

（Петрозаводский государственный университет）

【A11】「Русская идея」Ф. Достоевского и ее значение в истории развития русской мысли

ЦЗУ Чуньмин

「Русская идея」— основная концепция русской философии. По мнению Ф. Достоевского, в силу своей способности к всеобщему отклику «Русская идея есть осуществление всеобщего, всемирного союза», который является уникальной и божественной миссией, данной русскому народу Богом. Автор пытается переосмыслить концепцию «Русской идеи» Ф. Достоевского с точки зрения истории мысли и указать на ее значение в истории русской мысли. Во-первых, «русская идея» в своей основе — это «сознание уникальности», идейные корни которого восходят к славянофильству, возникшему в первой половине XIX века. В знаменитой полемике между славянофилами и западниками русский народ достиг подлинного пробуждения своего самосознания и проявился в расколе сознания в виде оппозиции славянофилов и западников. Во-вторых, в основе философской мысли Ф. Достоевского лежит религиозная этика, согласно которой свобода воли — самое ценное для человека, но нужно научиться правильно ею пользоваться. Только когда мы свободно выбираем веру в Бога как основу абсолютной ценности и «сеем семена любви» в сердцах других людей, мы можем обрести истинный смысл жизни. В-третьих, как теоретически соотносится этот универсальный нравственный поиск со спецификой «русской идеи»? По мнению автора, это связано, прежде всего, с сильным мессианским сознанием русского народа. Со времени возникновения в XVI веке доктрины «Москва — Третий Рим» представление о России как о богоизбранном народе стало одной из важных черт ее национального духа. Это то же самое, что и выдвинутое представителем славянофильства А. С. Хомяковым понятие «соборность». Оба они подчеркивали всеобщее единение всего человечества на основе общей любви к Христу. В-четвертых, интерпретация Ф. Достоевским «идеи России» представляет собой одну из основных линий в истории русской мысли — осмысление исторической судьбы и миссии русского народа с точки зрения всего человечества. Другое направление мысли, напротив, исследовало вопрос об историческом пути России с позиций национального эгоизма, таких как славянофильство и евразийство. Однако основной тезис о том, что «русская нация уникальна», одинаков независимо от того, рассматривается ли он с точки зрения всего человечества или с позиций национализма.

(Институт Философии Китайской Академии общественных Наук)

【A12】リュドミラ・ウリツカヤ作品『子供時代45—53』におけるスターリン時代の記憶

小嶋 冨

本発表では、リュドミラ・ウリツカヤ（1943～）の作品『子供時代 45—53：きっと明日は幸せになるだろう』（2013）におけるヨシフ・スターリンへの断片的かつ日常的な言及が持つ特徴について考察する。

ウリツカヤのほとんどの作品は、時代を少し遡ったソヴィエト期、とりわけ第二次世界大戦後からペレストロイカ直前の1980年代までを中心に展開されているのだが、『子供時代 45—53』は、1945年から53年という戦争直後のソヴィエトの生活について、この時代に幼少期を過ごした人々から手紙のかたちで送られた回想を収録したノンフィクション作品である。その章のなかには日常生活に紐づけられたタイトルも多く（例「食べた」や「飲んだ」）、終戦直後の極度の物資不足のため、全体を通じて食べ物にまつわる回想の多さが特徴的と言えよう。

しかしそれにもまして、当時の人々の日常と切っても切り離せないのは、指導者スターリンの存在である。1953年にスターリンが病死すると、子供たちは、ラジオ放送や学校でそのニュースを聞き、大人たちの悲嘆や歓喜、葬儀の騒動などを目撃したり、それに巻き込まれたりもした。そんな子供たちが抱いたスターリンの印象は単純ではない。学校ではイデオロギー教育を受け、身近では近い者をラゲリで失い、指導者の葬式では嘆くといったことが1人の人間の中で起こっているからだ。「みな死ぬ。そしてスターリンも……？」の章には、スターリンの死が発表されたさいのエピソードが出てくるが、この出来事自体は別のテーマの章でも部分的に言及されている。スターリンの死やその後に起こった葬儀は、子供たちから見たエピソードとして、『子供時代 45—53』だけでなく、ウリツカヤの小説作品にもしばしば登場する。一見すると、歴史的には劇的な転換点であるはずの「スターリンの死」が、この世代にとっては必ずしも特別視されていない点が注目になる。彼らはその出来事やそのときの感情を覚えており、スターリンは常に子供たちの日常生活に溶け込んでいた。しかし、彼らはスターリンの死それじたいに大きな影響を受けないまま、子供時代を終えていくのである。ここからわかるのは、政治的・歴史的な言説やイメージとは根本的に位相の異なる、ソ連の普通の人々の日常生活に完全に溶け込んだスターリンのあり方なのである。

(早稲田大学院生)

【A13】リムスキー＝コルサコフのいわゆる「汎神論」について

山本 悠介

発表者は、ロシア芸術におけるフォークロア、とくに異教の問題について関心を持っており、この観点から、作曲家 N・A・リムスキー＝コルサコフ (1844-1908) の異教観について研究してきた。

リムスキー＝コルサコフの思想・世界観において、異教が最も重要なキーワードの一つであることは自明のように思われる。彼は半数以上のオペラにおいてフォークロアを主たる題材とし、その背景には民謡集の作業以来培われた異教への関心があった。また、自伝やヤストレプツェフの回想の中に、そうした異教への憧れが、単なる芸術的関心を越えて彼自身の世界観、ある種の信仰に影響を及ぼしたことも綴られている。

これまで発表者は、リムスキー＝コルサコフの一連のフォークロア・オペラ、なかでもラブシーンが「三部作」と呼んだ『雪娘』(1881)、『サトコ』(1896)、『見えざる街キーテジと乙女フェヴローニヤの物語』(1904) に注目し、彼がこの三作を通して彼の考える異教の喪失の歴史——自然と人間の乖離——を描いていることについて分析した。今回の発表では、この視点に立ちつつ、リムスキー＝コルサコフの異教観の具体的な中身について考えたい。

今回の発表の核となるのは「汎神論 (пантеизм)」という概念についてである。リムスキー＝コルサコフの世界観、異教観を説明するにあたり、この言葉は、しばしば殆ど疑問なく使われてきたように見受けられる。そもそもこの言葉は、自伝の中で、異教とほぼ同義に近いかたちで使われている。しかしながら、果たして彼が考え、作品の中で描いてきた異教像というのは、本当に汎神論と呼ぶべきものなのだろうか。このような疑問から、関連する概念を整理しつつ、主に上述の「三部作」における描写や構造の分析を通して分析を行った。その結果、たしかに汎神論的な側面も強く見られる一方、超越的な、人格神論的な側面もまた一貫して見られることが明らかになった。

これを踏まえて、発表者は、リムスキー＝コルサコフの異教観は汎神論よりも万有内在神論 (панентеизм) という言葉によって説明するほうがより適切であると考えに至った。彼の作品のもとでは、この万有内在神論的な世界観が、時代によって変化する宗教 (異教から正教へ) の中でも変わらない、民衆の世界観の根底にあるものとして描かれているのである。

(神戸市外国語大学院生)

【A14】「事物」へのまなざし：1920年代後期のシクロフスキーの映画論をめぐって

林 ゆかり

本発表では、ヴィクトル・シクロフスキーの映画論における「事物」の捉え方の変容に着目し、その変容が、同時代が要求する「注文」との関わりにおいて映画を論じるシクロフスキーにとって、いかなる意義を担ったのかを考察する。

「手法としての芸術」(1917)において異化の概念を説明する際に提示される「見ること」と「認知すること」の二項対置が『文学と映画』(1923)に引き継がれていることに見られるように、映画上の知覚に関するシクロフスキーの初期の見解には異化の理論が反映されている。そこにおいて映画上の知覚とは、映画上に現れる事物や動きが担う意味を捉えることとされ、そのとき映画上の事物や動きは「認知＝非芸術」の領域に属する「記号」とみなされる。「映画の意味論」(1925)においては、そうした「記号」が持つ意味に重要性が置かれ、むしろストーリーやプロットといった外的構造によって意味づけられる「記号」こそが、芸術としての映画を構成する素材として位置づけられることになる。

これまでの研究では、そうした映画上の事物を「記号」とみなすシクロフスキーの見解が注目されることはあっても、「記号」へと還元される以前の映画上の事物に対するシクロフスキーの関心については、ほとんど顧みられることがなかった。しかし1926年頃を境に、映画を構成する素材としての「事物」に関するシクロフスキーの捉え方に変化が見られるようになるが、そうした見解の変容を促した要因の一つに、エイゼンシュテインの映画作品があったと考えることができる。本発表では、1920年代後半に執筆されたエイゼンシュテインの映画に関する一連の論考から、シクロフスキーがエイゼンシュテインの映画に見出した新たな「事物」について検討する。

その上で、『新レフ』1927年第11-12号に掲載された論文「誤りと発明」(1927)におけるエイゼンシュテインの『十月』に関する記述を、『新レフ』同号掲載の映画討議記録「レフと映画」において、同人らが理想とした歴史的出来事の表象方法との対比を通じて検討する。それにより、新たに見出された「事物」を映画の素材として捉え直すことが、映画を「時代の注文」に密接に結びつく芸術とみなすシクロフスキーにとって、「注文」から逸脱する映画表現の特殊性、及び映画表現の新たな手法の「発明」を擁護する姿勢を可能にしたことを明らかにする。

(早稲田大学院生)

【A15】ザボロツキイとトゥイニャーノフ：パロディの問題をめぐって

金丸 駿

1920 年代後半から 1930 年代にかけて、ニコライ・ザボロツキイとユーリイ・トゥイニャーノフの間に親密な交流があったことはよく知られており、両者を含む文学仲間が夜毎に文学談義を交わしていたという同時代人の回想も残されている。実際、二人は互いに高く評価していたらしく、詩人の子息に抛れば、トゥイニャーノフは自著『擬古主義者と革新者』（1929）に「我々の時代の最初の詩人に」という献辞を記してザボロツキイに贈呈していたとされる。また、同時代人の証言に抛れば、ザボロツキイ自身も、「私はトゥイニャーノフに多くを負っていた」と回顧していたという。こうした証言や事実を鑑みれば、両者の作品や論考に何等かの具体的な影響が反映されていると考えるのは不自然ではない。しかし、先行研究においては交流の有無の確認に留まり、具体的なテキストに即した影響関係の分析はいまだ為されていない。そこで本発表では、ザボロツキイの第一詩集『ストルプツィ』（1929）収録詩篇を精読し、トゥイニャーノフの論考からの影響を考究したい。

なお、ここで主に取り上げたいのは、トゥイニャーノフのパロディ理論である。パロディの問題は、ザボロツキイも無縁ではなく、例えば『ストルプツィ』における多様な文体や高尚・低俗の語彙の混淆に、過去の詩のジャンルや個々の作品へのパロディ的意識が働いているとする指摘は少なくない。また、ザボロツキイ自身、コジマ・ブルトコフやレビヤードキン大尉といった人物像に強い関心を示しており、そうした点からも、詩人が文学におけるパロディの問題を強く意識していたことが窺える。したがって、本発表では、『ストルプツィ』所収詩篇における、トゥイニャーノフのパロディ理論からの影響や示唆を明らかにし、それが一篇の成立にどのように関わるのか、さらには詩集全体の性格や詩人の企図とどのように結びついているのかを検討したい。なお、一連の分析は、ザボロツキイと文学的に近い立場にあった詩人ニコライ・オレイニコフの問題意識や、オベリウという運動体の性格を考察する上でも重要な契機をもたらすものと思われる。

（早稲田大学院生）

【A16】レールモントフの日付を題した抒情詩群

山路 明日太

作家レールモントフは長篇小説において日付を巧みに利用し、日記体形式を小説のプロットに取り込んでいる。

『リゴフスカヤ公爵夫人』冒頭では「1833 年 12 月 21 日午後 4 時、ヴォズネSENSカヤ通りを（中略）ひとりの若い官吏が歩いていた。この日時を覚えておいてほしい」と語り出し、二人の主人公が馬轡の事故をきっかけに対立する物語が展開されていく。この日時の記載はその事故の迫真性を担保し、物語の中に読者を引き込んでいく効果があると言える。

『現代の英雄』最大の章「公爵令嬢メリー」では、この章のみ冒頭から日付が付けられた日記体形式がとられ、主人公の心理と感情の変遷について時間経過を追って把握できる形になっている。日記とは、何者かが自らの私生活上の現実的な出来事や体験、思索について記述することを前提とする。その形式的特徴は一人称による語りであり、原則としてある一日の記録であって、書き手の観点からその一日が特徴づけられて、おおくの場合、その日の日付が記載される。「公爵令嬢メリー」は日記体のそうした特徴を利用した章である、と言える。

このように後年になって日付の記載や日記体形式を小説に利用したレールモントフであるが、彼の抒情詩には日付を題した詩が 8 篇あり、1830 年から 31 年に集中的にみられる。それらの詩篇は表題としての日付の書き方がさまざまで、年月日の書き方の順序もまちまち、年が欠落しているものもあれば、日が欠けているものもある。それだけ日付という表題形式には無頓着だったということができ、のちに日付や日記体を巧みに利用したレールモントフと比較するならば、きわめて自由な印象を抱かされる。創作活動初期の抒情詩における日記体の扱われ方は、公表を想定しない、より自由な心情の吐露、という側面がより強く感じられるのだ。日付を表題としたレールモントフの抒情詩群には、そうした自由な習作的扱いが反映されている。リディア・ギンズブルグがいうように、レールモントフの抒情的主人公の物語は「自伝的でありながら、同時に詩人の個人的経験の枠を超越している」。その最大の成果が、日付を題した抒情詩群のなかでも最も有名で長大な詩篇「1831 年 6 月 11 日」であろう。それは詩人の思索と想像の産物だといえる。

発表では、日付を題した抒情詩群について分類整理しつつ、「1831 年 6 月 11 日」を中心に、それらの詩群の意味づけを行いたい。

（中京大学）

【A17】バラトウインスキー「秋」におけるジャンルの問題

岩間 成美

本報告では、エヴゲーニー・バラトウインスキー（Евгений Абрамович Баратынский, 1800-1844）の後期の代表作「秋」（Осень, 1837）を取り上げ、ジャンル論を手掛かりとして作品分析を行う。

ロシア・ロマン主義の確立期にあたる 19 世紀前半にはジャンルをめぐる状況に大きな変動が生じており、バラトウインスキーの創作もこうした背景と密接に結びついている。1827 年に刊行された彼の第一詩集においては古典主義的な規則に則って詩がジャンル別に配置されていたのに対して、1835 年の第二詩集においてジャンルの別は撤廃され、「秋」が収録された 1842 年の第三詩集『たそがれ』には「抒情的連作」としての性質が見られるようになっていたのだが、多くの研究者が指摘するように、こうした詩集の構成原理の変遷は、当時のロシア詩の傾向を反映したものであった。バラトウインスキーの「秋」は、ロマン主義の発展に伴うジャンル体系の弱体化が進行する状況下で執筆された作品として位置づけられるのだ。ただし、「秋」には既存のジャンルとの結びつきを示唆する要素を見出すことができる。この詩にはエレジーに特徴的なモチーフが用いられており、加えて先行研究では、オードのジャンルとの関わりも指摘されている。ジャンル体系が弱体化してゆく中で、しかし依然としてバラトウインスキーが既存のジャンルとの関わりの中で「秋」を執筆したことがうかがえるのだ。

本報告では、先行研究をふまえながら「秋」と既存のジャンルとの関係を分析してゆく。「秋」においては、詩の前半部で秋の農村の自然が描写され、その後、生や死、詩人や詩作といった問題に関する思索が展開される。前半部では収穫の季節を迎えた「村人」の豊穡さが描かれているのに対して、詩の中盤以降で強調されるのは人生の実りの無さであり、この詩の抒情的主体は、詩作の問題に対しても一貫して悲観的な態度をとっている。そこで、こうした作品の主題がジャンルとの関わりにおいていかに語られているのか、という点に重点を置いて「秋」の分析を行うことによって、ジャンルをめぐる状況が激しく変化し続けるなかで創作を行ったバラトウインスキーの後期の詩学を検討する。

(京都大学院生)

【B01】現代ロシア語における女性を指示する名詞の使用をめぐる

光井 明日香

本発表では、現代ロシア語における女性を指示する際の名詞の使用について記述的な整理を進める。また、光井 (2024) で挙げた、女性を指示する際に男性名詞を使用するか女性名詞を使用するかという選択において影響を与えていると考えられる 6 つの要因についてある程度図式化することを目指す。

女性を指示する際に врач「医師」などの職業や社会的立場を表す男性名詞を使用することが多くの先行研究によって指摘されてきた。さらに Янко-Триницкая (1966) など は、преподаватель-преподавательница「講師」などの女性名詞のペアの存在する男性名詞が女性を指示する際に使用されることがあると指摘している。しかし、フェミニズムの発展に伴い、Первак (2020) などが指摘するように、最近特にインターネットなどにおいて女性を表す際に、авторка「著者」などの新しい女性化名詞の使用が見られるようになり、さらに新しい女性化名詞だけではなく учительница「女性教師」のような従来から存在する女性名詞もマスメディアでは積極的に用いられる傾向があるという指摘もなされている。本発表では、まず Граудина и др. (2004) の挙げている名詞のリストを参照し、コーパスを用いて実際にどの程度女性名詞が用いられているのかのデータをまとめる。その結果、リストには書かれていても実際にはほとんど 1910～20 年代にしか用いられていない名詞などもあり、現在でも積極的に用いられている名詞とそうではない名詞があることがわかった。

また、光井 (2024) では女性を指示する際の名詞選択において影響を与えていると考えられる要因として、「形態的な要因（接尾辞）」、「職業や社会的地位であるかどうか」、「昔から存在するのか」、「（その職や地位についている人）を高いと見ているか低いと見ているか」、「その職に就いている女性の数」、「スポーツか芸術の分野かどうか」という 6 つの項目を示したが、本発表ではこれらの要因についてある程度図式化することを目指す。例えば врачиха や повариха という иха のついた女性名詞は通常用いないが、пловчиха「水泳選手」は用いることから、形態的な要因よりもスポーツや芸術の分野かどうかという要因の方が優先される。

(東京外国語大学)

【B02】ロシア語における名詞の（不）加算性と有界性について：可算名詞化接辞 **-ин-/инк-** に注目して

宮内 拓也

名詞はその加算性に応じて、可算名詞と質量名詞（不可算名詞）に下位区分される。この区分はロシア語においては、例えば **сколько** に後続する際の名詞の数の標示 (**сколько книг** と **сколько воды**) 等に現れる。可算名詞と質量名詞との区分に関わる意味的素性として、名詞の表す対象が境界線によって区切られているか否かを意味する有界性 (boundedness) が提案されており、可算名詞は [+BOUNDED]、質量名詞は [-BOUNDED] の素性を持つとされる。

本発表では、形態統語的観点から可算名詞と質量名詞の区分においては二値的な有界性という素性のみでは不十分である点を指摘し、意味的観点からロシア語の可算名詞化接辞は類別詞言語における類別詞と同様の機能を果たす点を指摘する。

ロシア語は **-ин-** や **-инк-** といった質量名詞から可算名詞を派生させる接尾辞を持ち、これらの接尾辞を添加するという形態論的手段で質量名詞を可算名詞化することができる (**виноград** > **виноградина**, **чеснок** > **чесночина**, **пыль** > **пылинка**, **снег** > **снежинка**)。しかしながら、本発表では、あらゆる質量名詞が接尾辞添加という形態的手段を用いて可算名詞化できるわけではない点を指摘する (**молоко** > ***моло{к/ч}ин(к)а** とか **мука** > ***му{к/ч}ин(к)а**)。このことは、質量名詞の中にも有界性に差が存在することを意味しており、理論的には有界性は二値的ではなく連続的なものとするか、別の素性を導入することで、少なくとも 1) 可算名詞、2) 接尾辞によって加算名詞を派生可能な質量名詞、3) 接尾辞によって可算名詞化できない質量名詞の 3 つの区別を可能にする必要があると考えられる。

意味解釈については、不可算名詞は累積的指示、分割的指示が可能であり、可算名詞は不可能であることがよく知られている。可算名詞複数形も質量名詞も共に累積的な外延を持つ点を踏まえれば、意味的観点から質量名詞の可算名詞化 (**виноград** > **виноградина**) はまさに複数名詞を単数名詞 (**книги** > **книга**) にするのと同等の操作であると言え、その観点から見れば **-ин-** や **-инк-** といった接尾辞はまさに日本語などの類別詞言語における類別詞と同様の機能を持っていることが指摘できる。

(北海道大学)

【B03】ロシア語と日本語の動詞アスペクトに名詞－動詞の概念的アナロジーを探る

金子 百合子

本研究の目的は、名詞範疇において数量類別詞言語である日本語と文法数および可算／不可算の区別を持つロシア語という言語類型的対立を背景に、その概念的基盤が、日本語とロシア語の動詞アスペクトにおいてどのように整合性を持つのか、すなわち、名詞と動詞の概念的および機能的アナロジーの整合性を、「スラヴ語における動詞類別詞仮説 Verb Classifier Hypothesis in Slavic languages」(Janda et al. 2013, Dickey & Janda 2015) の立場から検証することにある。

可算名詞と不可算名詞（物質名詞）の対立と、完了体動詞と不完了体動詞の対立に概念的類似点があることは知られているが (Dahl, Talmy, Langacker)、Janda(2004)は名詞－動詞のアナロジーを「完了体は個別の固体であり不完了体は流動的な物質」と比喩的に表した。この概念モデルに立脚する「スラヴ語における動詞類別詞仮説」では、名詞類別詞言語におけるはだかの名詞が記述する事物と、ロシア語においてははだかの動詞である不完了体動詞が記述する状況は、共に物質的な性格を持つ点で平行しており、両者ともに、類別詞、前者では名詞類別詞、後者では動詞アスペクト類別詞（完了体化接頭辞）、が加えられることで単位化され、個別化されると主張する。

日露対照言語学的な視点からすれば、ロシア語のはだかの形である不完了体動詞に日本語の動詞のはだかの形、つまりスル形、が相当するが、スル形を完成相と特徴づける立場 (工藤 2000、須田 2010) からすれば、奇妙な対立構造が生じる。また、名詞類別詞言語に位置付けられる日本語の動詞アスペクトに名詞－動詞アナロジーがどのように実現するのか不明である。報告者は次のように主張する。①日本語のはだかの名詞が持つ均質的な部分＝全体構造は、はだかの動詞（スル形）にも存在し、それが状況のアスペクト解釈に複数の可能性をもたらすことで、この形はロシア語の不完了体動詞よりも広い意味範囲を持つ。②ロシア語では、不完了体動詞と完了体動詞が語彙文法的に密接に結びつく体ペア化が、状況の内部構造に異質性と終了限界への指向性を持ち込む。これは時間における数え上げ行為であり (cf. Gelman & Gallistel)、ロシア語が文法数言語であることと整合する。

(神戸市外国語大学)

【B04】ウクライナ語における/b/の音韻表示

渡部 直也

ウクライナ語においては、文献において記述されている「標準的発音」とは異なる発音が観察され、教科書やウィクショナリーなどに提示される表記と音声にもずれが確認される。本報告は其中で、子音/b/のふるまいに着目する。

同子音は、ロシア語などのような摩擦音/v/ではなく、/w/に近い接近音として記述されており、近年の日本の報道における表記でもそれを反映する動きが見られる（例：アウディーウカ *авдіївка*）。特に他のスラヴ諸語との差異として、直後の無声子音に同化する無声化に関する記述が見られない。しかしながら実際の発音では、無声化と思われる音声が見られる。

本研究では、母語話者5名を対象としたパイロット調査を実施した。一部の録音失敗を除いたうえで、/b/に無声子音が後続する4語から計19トークン、有声子音が後続する3語から計14トークンが得られた。音響分析の結果、前者については、そのうち15トークンで無声化が確認された。また後者について、9トークンは接近音、5トークン是有声摩擦音であり、調音に関するゆれが観察された。

以上の結果からウクライナ語の/b/について、少なくとも音素としては接近音ではないと考えられ、次のような定式化を提案する。まず、音素として有声摩擦音が考えられるが、ロシア語などとの違いとして、調音位置が両唇寄りであると仮定する。有声の場合、通言語的に珍しい摩擦音[β]よりも、多くの言語で見られる接近音[w]となりやすいことが予測される。一方で、元が摩擦音であるため直後の無声子音に同化しやすく、無声摩擦音[ɸ]ないし[f]が生じることとなる。

ただし、話者によって発音が異なる傾向も確認されたため、音素の認識についても個人差がある可能性がある。元来の方言差に加え、日常生活におけるウクライナ語およびロシア語の使用頻度によって、発音にバリエーションが生じることも予想される。ロシアによる全面侵攻以降、ウクライナ語への切り替えを行う国民も増加しており、同言語について今後さらなる多様性が生じると思われ、詳細な調査が必要である。

(大阪大学)

【B05】「穏やかなウクライナ化」とは何か：ウクライナ語の普及に関する言説の分析

池澤 匠

現在のウクライナにおける言語状況の顕著な傾向として、いわゆる「ウクライナ化」が挙げられる。ウクライナは独立以後、原則としてウクライナ語を唯一の「国家語」とする政策を進めているが、これは同時に一般市民の間におけるウクライナ語の普及活動と結びついてきた。このような流れは、特に2014年のマイダン革命、それに続くドンバス戦争、ならびに2022年2月24日以降のロシアによるウクライナの全面的侵攻により、更に顕著なものとなっている。

この文脈において、ウクライナ語の普及活動の一環として「穏やかなウクライナ化 (лагідна українізація)」というスローガンが注目を浴びている。この用語は日常のコミュニケーションにおける「簡単な」あるいは「非強制的な」ウクライナ語への移行を指すようになっている。例えば、このフレーズはインターネットブラウザの拡張機能の名称としても採用されており、ロシア語によるコンテンツ表示を削減し、ウクライナ語によるものを優先的に表示させる仕組みとして、話題になった。更に、同様の名称を題したウクライナ語の教材がメディア・SNS・動画サイトなどで共有されており、市民のロシア語からウクライナ語への移行を積極的に促す役割を果たしている。

ところが、ウクライナ語への「切り替え」の枠組で提唱される、この「穏やか」な概念は、実は新しいものではない。2022年以降の全面的侵攻の以前にも、このようなウクライナ語への移行を誘う文言として、「穏やかな」「簡単な」「快適な」などと形容される「ウクライナ化」が提唱されてきた。本報告では、特に全面的侵攻以降に多用されつつも、定義が曖昧なまま用いられている「穏やかなウクライナ化」という概念について、この用語を冠するコンテンツや、ウクライナ語への移行を論ずる言説を分析することで、その起源や意味について考察することを目的とする。特に、この用語が一般的に推奨されない「強制的なウクライナ化 (примусова українізація)」と対義語の関係にあることに着目し、「穏やかなウクライナ化」が提唱される背景について論ずることを目指す。

(日本学術振興会)

【C01】ショスタコーヴィチの 1930 年代のバレエへの過酷な非難に関する一考察

村山 久美子

今発表では、1930 年代の、不幸にも上演禁止となり、現代になって新たな生命を得て高い評価を得ているショスタコーヴィチのバレエ『黄金時代』（1930 年）、『ボルト』（1931 年）、『明るい小川』（1935 年）を取り上げ、演出内容を分析し、過酷な非難が現れた一因を、1920 年代末から 30 年代前半のソビエト・バレエの状況から考察する。

ロシア革命後、芸術界が一斉に、新世界にふさわしい新しい芸術を熱狂的に探索し始めたアヴァンギャルドの時代は、逆から言えば、古典バレエに携わる者にとっては、困難な時期の幕開けでもあった。

伝統ある国立のバレエ劇場は、伝統とは無縁な「純粋な」プロレタリア文化を創ろうと考えた改革指導者たちの一部から、強い圧力を受け、革命後の新しい世界では消滅する運命にある、生ぬるい芸術と弾劾された。

古典バレエ作品の演目に対する非難と同時に、バレエの語彙であるクラシック舞踊も攻撃された。

国立オペラ・バレエ劇場が、バレエの台本コンクールを行って、若い振付家たちに『黄金時代』を制作させたのも、アヴァンギャルドの手法を取り入れて国立バレエ劇場を守ろうとしていたロプホーフ振付による『ボルト』や『明るい小川』が制作されたのも、このような状況を打破するためのものであったと考えられる。

ところが、周知のように、ロシアの芸術界は、1932 年から社会主義を宣伝する社会主義リアリズム路線へと舵を切り始め、1934 年には社会主義リアリズムの表現のみが公認の芸術創作法となる。

国立のバレエ劇場では、古典文学を創造の糧として、踊りで心情を台詞のように語り物語を描くドラマバレエのジャンルが台頭してくる。このジャンルが確立するのは、1934 年に R・ザハーロフ演出振付ブーシキン原作の『バフチサライの泉』が発表された時とされているが、実際は、1930 年代初めから、アヴァンギャルド芸術の群衆劇やアジプロ演劇から、個人の心理、感情を描くドラマのバレエへの傾向が急速に強まって来ていたのである。

『黄金時代』『ボルト』『明るい小川』の不幸な運命は、このように、アヴァンギャルド芸術時代から社会主義リアリズムの時代への移行期に創作されたことにある。19 世紀に古典バレエ作品を生んだ M・プティパの創作法である、音楽を表現する動きの徹底的な追究を 20 世紀に受け継ぐロプホーフに、ザハーロフをはじめとするドラマバレエ信奉者が、社会主義リアリズムの後押しを受けて勝利したということができる。

(早稲田大学)

【C02】スターリン期ソ連アニメーションにおける運動する植物

浜渦 理起

スターリン期のソユーズムリトフィルムに多大な影響を与えたディズニーのアニメーション作品は、それ以前のアニメーション作品と違い、運動によってキャラクターの内面を表現したことが評価されている。それを踏まえ、デヴィッド・マクファディエンは『Yellow Crocodiles and Blue Oranges』（2005）において、ソ連アニメーションのキャラクターがディズニーに影響を受け、感情的な性質を持ったと論じている。

しかし、スターリン期ソ連アニメーションにはそうした内面性のあるキャラクターのほかに、“動く植物”という内面性を欠いた存在が、いくつもの作品にわたって登場する。そうした植物は、太陽光によって、タイムラプス撮影の映像のように急速に成長し、しばしば踊るように体を動かし始める。

本報告では、スターリン期の諸作品における動く植物の表象を、植物や動物に生気を与えるものとして登場する太陽との関係性に注意しつつ分析し、その性格を考察する。

日光を浴びた植物が運動するという描写は、ソユーズムリトフィルム設立と同年に制作された『返された太陽』（1936）にすでに見られる。そして、『返された太陽』と同じく奪われた太陽が取り戻されるというあらすじの『盗まれた太陽』（1943）、冬から春への変化を描いた『春のメロディ』（1946）、『喜びの歌』（1946）、農業作物の生産を描いた『イヴァン爺さん』（1939）『白い金（綿）』（1947）まで、動く植物たちは、戦前から戦中、戦後に至るまでの長い期間にわたってアニメーション作品の中に登場した。

本報告では、そうした作品の動く植物の描写が、動物や人間を含むキャラクターの内面・感情の非個人的・他律的な性格と関係することを明らかにする。また、生気を与えるものとしての太陽の描写が、キャラクターに生気を与えて動かすために必要な実際のアニメーション制作プロセスを隠蔽する点で、セル・アニメーションのメディア的な性質と組み合わせられていることを論じる。そして、1940 年代末からは、植物が太陽と無関係に成長・運動する姿が、『古い樫の木の物語』（1948）、『七色の花』（1948）、『緋色の花』（1952）といった作品で描かれていることを指摘し、新たに登場した自律的な存在としての木々の描写と、当時のソ連の環境政策との結びつきを検討する。

(東京大学院生)

【C03】フルシチョフ期におけるソヴィエト宮殿競技設計に見る記念碑性の構想と変容——1957-1959年の設計案に基づく空間的分析

鈴木 佑也

本報告は1957から1959年にかけて二度行われた建築競技設計《ソヴィエト宮殿》を対象としたものである。この競技設計に提出された多くの設計案は公式カタログでは「ソ連建築の新たな方向性を模索する試み」と述べられており、実際に建設の参考となった設計案はその後のソ連建築界におけるモダニズム建築の隆盛に寄与したと言われている。この競技設計の1巡目と2巡目では、1930年代の《ソヴィエト宮殿》競技設計と同じように、主流となる建築的特徴は異なり、まさに「方向性を模索する」状況が見て取れる。しかしこの点を建築物の外観、建築スタイルという観点から1920年代に国内で一つの建築潮流を形成していたモダニズム建築への収束、あるいは1950年代の国際的な建築潮流へのシフトとするのは一見可能である。だが本報告ではソヴィエト宮殿という特殊な建築物が担わされた「記念碑的であること」という性質（記念碑性：モニュメンタリティ）に注力して、改めてこの競技設計の意義を問いたい。

本報告ではこの点を究明するため以下のような構成で報告を行う。まず競技設計（1巡目、2巡目）の受賞設計案を分析対象とし、その中で競技設計に設計案を提出した各設計者が求めた独自性がどういった点に注力されたかを明らかにする。その際に建築物の外観のみならず、建築物と対象となる建設予定地の街区との関係、訪問者の動線といった点からも分析を図り、ソヴィエト宮殿がどのような建築空間として想定されていたのかを論じる。《ソヴィエト宮殿》の設計において求められた建築空間の性質が特殊であるとはいえ、当時の大型建築プロジェクトにもその性質の片鱗は認められるのだろうか。この点を当時企画されたイデオロギー関連の記念碑及び宮殿型建築プロジェクトと比較しながら、《ソヴィエト宮殿》に求められた性質をより明確にする。ここでも対象の作品とそれが設置/建設される地区との相関性に特化し分析を進める。最後に、このような記念碑性が当時のソ連建築界においていかに制度的・文化的に位置づけられていたかを検討する。その際、広範な文化状況への議論は避け、主に建築分野で継続的に追求されていた審美的・構成的要素に着目することで、《ソヴィエト宮殿》の記念碑的空間構想が当該時代の建築的審美観や政治的要請といかに交差していたのかを、生成過程とともに解明する。

（新潟国際情報大学）

【C04】アルファベット本に見る現代ロシアの愛国教育

藤原 潤子

本発表は、ウクライナ侵攻開始以降のロシアにおける愛国教育政策において、アルファベット本（Азбука。アルファベット順に語彙を配列した本）が果たす表象的・政治的役割を分析するものである。

具体的な検討対象は、2022年に学校教育に導入された週次授業「大切なことについての対話（Разговоры о важном）」と連動して登場した教材『大切なことについてのアルファベット（Азбука о важном）』、その後、各地の教育機関や文化団体によって制作された地域教材「地域のアルファベット（Азбука регионов）」、さらに戦争記憶や軍事行動を主題とする「戦争のアルファベット（Военная азбука）」「勝利のアルファベット（Азбука победы）」などである。また、国家的言説に対抗する試みとして制作されたアルファベット本も考察の対象とする。

本研究では、これらのアルファベット本をできる限り網羅的に収集し、時代を映し出す資料として整理すると同時に、語彙の傾向、価値観の構造などを比較分析する。さらに、各教材の成立経緯や流通実態、受容のされ方にも注目する。

国語教育の基礎となるアルファベット本というメディアを通じて、国家が流布しようとする言説と、それに対抗する言説が、いかに立ち現れ、拮抗しているのかを明らかにしたい。

（神戸市外国語大学）

【C05】片上伸と文芸教育論——ロシア留学で見聞したことは日本の児童文化の世界でどのようにいかされたか——

南平 かおり

ロシア文学者片上伸(1884-1928)は、日本文学界における自然主義文学、また時代を経てからはプロレタリア文学の論客などとして幅広い評論活動をしたことで知られる。片上は早稲田大学に露文科を創設すべく、大学からロシアに派遣されたわけだが、1915(大正4)年から1918(大正7)年にかけての留学(第1次ロシア留学)期間中に、興味の対象は文芸教育の分野にまで広がった。ロシア滞在中、現地の小中学校を訪問し、1916(大正5)年12月末から17(大正6)年1月初頭にかけて開催された第1回全ロシア中等学校ロシア語ロシア文学教師会議にも参加している。帰国後、主に1919(大正8)年から21(大正10)年にかけて、片上は文芸教育に関する評論を新聞や雑誌に精力的に発表する。1922(大正11)年には、それらを『文芸教育論』として1冊にまとめ、文教書院から刊行した。

片上が文芸教育に深い関心を寄せたのは、まさに大正デモクラシーの時代であり、当時の日本の児童文学界では、1918年に児童文芸雑誌「赤い鳥」が誕生し、反響を呼んだ。また教育界では、児童の「芸術自由教育」に関して教育者のみならずさまざまな分野の専門家たちによって活発な論議が交わされていた。片上は、露文科創設(1920年)の多忙のなか、1919年にはロシアで出会った画家の山本鼎らと日本児童自由画協会(後に日本自由教育協会と改称)を発足。1921年に創刊されたこの協会の機関誌『芸術自由教育』に、片上は詩人の北原白秋、山本らとともに編集委員として携わった。

本発表では、片上が第1次ロシア留学で得た知見が、同時代の日本の児童文化、児童文学の世界にどのような影響を与えたのか、という点について解明する。

日本児童文学界におけるロシア文化の受容の歴史を捉える上で、片上の文芸教育に関する評論活動が無視することはできないのだ。特に片上がロシア留学中に購入し、感銘を受けたという雑誌「Наш журнал(片上は、“吾等の雑誌”と訳している)」

(1916)に注目したい。この雑誌の存在についてはこれまで言及されてこなかったが、片上の文芸教育論について語る上で看過できないと考える。この雑誌を手掛かりに、片上を与えた影響をより鮮明に浮かび上がらせたい。

(早稲田大学、津田塾大学)

【C06】ユーリー・リュビーモフ演出『同志よ、信じよ……』(1973)にみる詩と観客の想像力の交錯
横山 綾香

演出家ユーリー・リュビーモフ(1917-2014)が、1973年にタガンカ劇場で上演した『Товарищ, верь... (同志よ、信じよ...)]は、アレクサンドル・プーシキンの詩や戯曲に加え、書簡・同時代人の発言といった広範なテキストを組み合わせ、詩人の生き様を表現した演劇作品である。本作は、言葉の選択や構成によって、当時の表現に対するさまざまな制約を巧みにすり抜けつつ、観客との間に深い感情的・倫理的な共鳴を生み出した点で、特異な意義をもっている。

本発表では、詩という形式がもつ多義性に注目し、それが観客に「語られなかったもの」を想起させ得たのか、また、そのような受容がいかにして時代の空気と結びついていたのかを考察する。

本作の特徴は、明確なプロットが存在せず、俳優による詩の朗読と、象徴的な視覚演出・空間構成によって劇世界が形作られている点にある。この間接的な形式は、表現が様々な制限のもとに置かれていた1970年代のソ連において、極めて効果的な方法となった。プーシキンの詩は公的にも広く受け入れられていたが、その内には孤独や良心といった普遍的主题が含まれており、リュビーモフはそれらを現代的な問いとして読み取り、舞台上に提示した。

たとえば、俳優たちが観客席に向かって「宛名のない手紙」を放つ場面は、言葉が行き場を失う状況を象徴すると同時に、観客に「届かぬ言葉」「声なき訴え」を想起させる仕掛けとなっている。また、『ボリス・ゴドゥノフ』からの引用「народ безмолвствует(民衆は押し黙っている)」を声に出さず、唇の動きのみを観客に見せる演出では、語られぬことがかえって強く響き、観客に内面的な応答を促す。

このように、『同志よ、信じよ...』における詩の言語は、語りきれないものをめぐる「沈黙の記号」として働き、観客はその演出に自らの思索を重ねて向き合うこととなった。本発表では、この詩的構成がいかに関者の内面に働きかける演劇空間を形成し得たのかを明らかにし、リュビーモフが「語ることのできないもの」を演劇的に立ち上げた方法を考察したい。

(東京外国語大学院生)

【C07】 キーラ・ムラートワの映画作品と人間学

衛藤 萌子

本発表の目的は、ソヴィエト・ウクライナの映画監督であるキーラ・ムラートワの、1960年代から2000年代初頭にいたるまでのフィルモグラフィを概観し、これらの映画作品において、人間学的思索がどのようになされているのかを明らかにすることである。

ソヴィエト期の代表作である『長い見送り』（1971）は公開当時8年間の公開禁止の処分を受けたが、これは映画のなかで描かれる人間観が問題となつてのことであつた。ムラートワは長い映画製作において、一貫して人間を中心的なモチーフとして扱っている。作品に登場する典型的な人物は、例えば対話的なコミュニケーションの構築に失敗する人々（代表的な例としては『チェーホフのモチーフ』（2002））、殺人をする人々（『運命の転換』（1987）、『三つの物語』（1997）、『二流の人々』（2001）、『一石二鳥』（2007））、窃盗や詐欺をする人々（『調律師』（2004）、『手回しオルガンのためのメロディー』（2009））、道端で排泄をする人々（『二流の人々』、『一石二鳥』）である。また、特に晩年のムラートワが好んだのは、生者と死者をモンタージュなどをおして混同させることによる、死をとおした人間学的思索であつた。また、ムラートワの映画全体に頻繁に登場する人間以外のモチーフも、人間学的なものとは密接に結びついている。例えば、人形や人体を模した彫刻などの人体のシミュラクル、動物などはその典型である。これらはすべて人間外的なものでありながら人間と似ているものとして提示され、人間とはなにかという問いを境界的に問いかける役割を果たしている。映画表現をとおした人間学的な省察は、ムラートワの映画製作を貫く最も重要な要素であるといえる。

先行研究でもたびたび、ムラートワの作品が人間学的な性質を持っていることが指摘されてきた。特にミハイル・ヤンボリスキーは、2008年に著したこの監督についてのモノグラフ『ムラートワ：映画人間学の経験』において、ムラートワの映画を「人間の本質についての考察」を伴う哲学的思考をもつたものとし、「人間とはなにか」という問いを通して、人間を記述し、発展させていくような、人間学的可能性をもつたものとして論じている。本発表では、ムラートワの映画の人間学的な思索が、映像表現の探求、特に編集・モンタージュによってこそなされているという見地に立ち、ムラートワの作品において人間学的な問題と接続されているのかを明らかにする。

(早稲田大学院生)

【C08】 東京復活大聖堂のイコノスタス

宮崎 衣澄

日本ハリストス正教会の首座主教座教会である東京復活大聖堂は、1923年の関東大震災による被災後、1929年に復興されたものである。東京復活大聖堂のイコノスタスが、ハルビンのイコン画家 H. ザドロージュヌイによって制作されたことが知られているが、これまで本格的な調査・研究の対象となっていない。その主な要因は、京都正教会や大阪正教会のイコノスタスが帝政ロシア期の著名なロシア人イコン画家によって制作されたことと比較して、ソ連期の在外宗務院に属するハルビン主教区で制作されたイコンへの関心が高くなかったことが挙げられる。一方で東京復活大聖堂のイコノスタスは、1920～30年代の日本正教会の状況、日本正教会とハルビン主教区との関係、ソ連期の在外教会のイコン制作を知る貴重な資料である。近年満洲におけるロシア正教会教会堂や亡命ロシア人画家の活動については、日本だけでなくロシア・中国の研究者の関心を集め、新たな研究が蓄積されつつある。本発表ではこれらの研究を参照し、次のことを明らかにすることを旨とする。①東京復活大聖堂のイコノスタス制作の背景、②イコン画家 H. ザドロージュヌイの評価と彼の創作における東京復活大聖堂のイコノスタスの特徴。

東京復活大聖堂のイコノスタスのイコンの多くは、ウクライナの聖ヴォロディーミル大聖堂のイコンを原画としている。大阪正教会のイコノスタスにも、聖ヴォロディーミル聖堂の M. ネステロフによる「キリスト洗礼」を原画とするイコンが1点収められているが、東京復活大聖堂では大部分のイコンが聖ヴォロディーミル聖堂に由来している。H. ザドロージュヌイは、19世紀のヴィザンツ様式、ネオヴィザンツ様式の影響を受けていたと考えられる。ロシア聖像保護委員会がイコン画の新たな規範として、聖ヴォロディーミル聖堂の B. ヴァスネツォフの壁画を採用したが、満洲といったディアスポラにおいてもこの規範が継承されたイコンが制作された。東京復活大聖堂のイコノスタスを、当時のハルビンの教会堂内部装飾や、H. ザドロージュヌイの類作と比較検討し、ハルビンにおけるイコン制作の特徴を明らかにする。

(富山高等専門学校)

【C09】見えざるソ連遺産とウクライナ・アイデンティティ：伝統撥弦楽器コブザを事例として

柚木 かおり

本報告は、日本では研究対象として十分にに取り上げられてこなかったウクライナの伝統音楽と文化政策の交錯領域を対象とし、その具体的事例を通じて、日本におけるロシア・ウクライナ研究を補完することを目指すものである。

ウクライナのバンドゥーラとコブザは、ザポリージャ・コサックの叙事詩を歌う盲人奏者が用いてきた伝統撥弦楽器として知られている。これら二つの楽器の名称と形状は長らく混在していたが、1980年に伝統音楽復興運動の中心人物 Г.К.トカチェンコ(1898～1993)によって明確に区別されるに至った。

2023～24 年大会の継続研究となる本報告では、特に 1980 年のトカチェンコの定義に焦点を当てる。この定義化の前提となったのは、中世研究の進展ではなく、1930 年代ソ連の伝統音楽に対する文化政策と、それに対するウクライナ側の受容および解釈によって生じた状況—戦後のバンドゥーラ合唱団における、伝統楽器とは系統を異にするアカデミック・コブザの創出—を是正する必要性だった。

本報告は、ソ連の文化政策の歴史的経緯を明らかにすることにより、ウクライナの現状を可視化することを目的とする。比較対象として、ソ連全体の基盤となったロシアにおける政策の成立経緯と適用実態の概要を示す。さらに、現在のウクライナでのバンドゥーラとコブザの認識について、戦時下につきインフォーマントは限られた人数ではあるが、伝統楽器奏者および音楽学校教員に聞き取りを行った結果をまとめ、彼らが語るウクライナ・アイデンティティの一端を紹介する。

(関西外国語大学)

【W01】芸術創造と芸術研究の理想的な協働を求めて：ショスタコーヴィチの場合——没後 50 周年、生誕 120 周年に寄せて——

〔全体の趣旨〕

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ(1906～1975)の生涯やその作品創作過程、同時代文化との関係を解明する研究は、ソ連邦崩壊後、世界的に著しく進展し、様々な伝記企画、『新作品集』(全 150 巻予定)プロジェクト、その他最新研究書の相次ぐ刊行という成果を築き上げている。一方日本では、こうした新成果が十分に活用されぬまま、相変わらずソ連時代の文献に依拠した情報が溢れ、音楽家たちの演奏実践だけが先行している。特に、彼の音楽を集散的に演奏するという音楽家や集団が日本には存在し、世界的に見ても特筆すべき足跡を残している。本ワークショップでは、創造と研究の国際的動向を俯瞰した上で、15 の交響曲を 2 周録音した指揮者の井上道義、15 の弦楽四重奏曲を 4 回全曲演奏したモルゴア・カルテットの第一ヴァイオリン奏者の荒井英治、声楽作品の 8 割以上を演奏指導している音楽学者の一柳富美子の三人が、それぞれの視点から創造と研究の理想的な協働について提起する。このパネルが進行する最中にも、実際に音楽家同士の「即興的化学反应」が生じて、フロアが演奏家と研究者のコラボレーションを体感できる、そんな時空を目指したい。最終的には、音楽・歴史・社会を横断する総合的なショスタコーヴィチ像を共有する場とする。

〔参加者〕

コーディネーター 一柳富美子

司会 山本明尚

登壇者 井上道義、荒井英治、一柳富美子

コメンテーター 伊東一郎

〔各発表のタイトルと要旨〕

1. 井上道義(元指揮者)：才能に場所と時間を越えさせるには？

このシンポジウムでは、音楽作品を残し続けたショスタコーヴィチという作曲家の作品を世に問う作業をするのだろうが、それは、2007 年日比谷公会堂での全 15 交響曲—挙演奏会のような共感に満ちた場所でしか実現できないと思っている。鳴り響く音楽そのものがない場はいわばユートピアのようなもの。その疑似ユートピアで、指揮者だった僕が敢えて講演の聴衆に話すことがあるとすれば、ロシアでショスタコーヴィチを振った時の体験や、僕が向き合った作品が僕にとってどのようなものだったか、ということだろう。ロシアには何度か演奏旅行しているけれど、2006 年公演で地方都市を回ったときは、ショスタコーヴィチが完全に過去の遺物と化している実態を目の当たりにしてショックを受けた。ロシアの地方都市では日本以上に演奏と研究の乖離が激しい。むしろ、他人事だからこそ俯瞰できる日本人の方が、ショスタコーヴィチと現代を繋げて対峙できるのかもしれない。音響の悪い京都会館で奇

跡の名演が実現した7番、12番のEsBCモチーフとの出会い、2007年のプロジェクトのこと等を改めて振り返る。そこに、時空を超えた才能の在り方のヒントが見つかるかもしれない。

2. 荒井英治（ヴァイオリニスト、東京音楽大学）： 演奏によってショスタコーヴィチを解体する

演奏する人間は、音を与える無限の世界に対して自由に開かれた感性を持っていたいと願う。いわゆる音型の解説（暗号）は実際の演奏に直接結びついてはいない。DSCHやスターリンなどの音名は、聴いて印象づけられる時とそうではない時がある（ヴァイオラ・ソナタでの全交響曲の冒頭部の引用）。そして音楽家は音と音を結びつけるもの（＝リズムや旋律線やハーモニー等）により自分だけのストーリーを作り上げていく。作曲者も、一貫した具体的なストーリーとして説明できるように曲を作っているわけではなく、音自体の有機的な繋がりからそれ自体のストーリーを紡いでいる筈だ。『これはスターリンを滑稽に踊らせている場面だ！』とある指揮者に言われたことがある。解釈としては否定しないが、演奏者の自由な探求を考慮すると、固定イメージでの演奏は肯定すべきではないと考えている。私にとって他の誰よりも身近な存在と自覚している作曲家・ショスタコーヴィチ。彼の音楽をオーケストラ、室内楽、そしてソロの立場で長年に渡り数を重ねて演奏してきた人間として、思うこと、自分なりに見えてきたこと、更には彼にとっての作曲することの意味や演奏家の存在とは何であったのかを探りたい。

3. 一柳富美子（音楽学者、声楽教師、和光大学）： ショスタコーヴィチの声楽作品にみる創作上の特徴と諸問題

意外かもしれないが、ショスタコーヴィチにはロシア語を伴う作品が非常に多い。独唱曲や歌劇・合唱曲だけでなく、交響曲・映画音楽にもロシア語がついている。歌詞たるそのロシア語を手がかりにすれば、「ここはスターリンを描いている」といった印象だけの解釈の入る余地がなくなる。だが残念なことに、こうした重要な手がかりを与えてくれている彼の声楽作品の研究は殆ど進展していない。本発表では、ロシア語を伴うショスタコーヴィチ作品の概観に続いて、楽譜に込められた演奏者への彼からのメッセージ、引用問題などを紹介して、声楽家から見たショスタコーヴィチ像を考察する。声楽付き交響曲には指揮者もヴァイオリニストも登場するので、登壇者三人の予期せぬ「協働」が起きるかもしれない。

【W02】プーチン体制下におけるロシア文化

●ワークショップ全体の趣旨：

2022年2月24日に始まったロシア政府によるウクライナ侵攻を経て顕在化した、ロシアにおける「文化」と「政治」や「国家」との関係性を「プーチン体制下の文化現象」と捉えることは可能だろうか。本ワークショップでは、演劇、映画、歴史学、宗教学といった各分野や文化関連の法改正の動向等の考察を通して、総合的に観察・分析し、ロシア・ウクライナ戦争が続く文化状況を総合的に検証しながら、とりわけ2014年のクリミア併合およびロシア政府によって示された「国家の文化政策の基盤」における文化政策の方針が発出された時期を軸として、2000年以降から2022年に至る道筋、その後の展開を考量したい。ウクライナ侵攻が引き起こされるに至ったプーチン体制下の現代ロシア社会において、「文化」はいかなる役割・機能を担ってきたのか。本ワークショップは、21世紀ロシアの文化現象に通底する文脈を明らかにし、現代の「ロシア文化」の多層性・多義性を描き出すと同時に、プーチン体制下の文化のあり方を歴史的に位置づけるための試みとなる。

●各発表者の氏名、発表タイトルおよび発表要旨

伊藤愉「2014年におけるロシア演劇と体制の関係」

本報告では、2014年のロシア演劇界の動向を再検討する。具体的には1)演劇雑誌Tearp.で特集されたウクライナ演劇特集（2014年17号）にみられるウクライナへの反応、2)同年7月1日以降の舞台上でのmar禁止、3)同年末にノヴォシビルスク歌劇場の『タンホイザー』がロシア正教会からの圧力により中止、などを対象にする。2014年という限定的な時期に、こうした政治的外圧を演劇界がいかに受け止めてきたかを考察する。

梶山祐治「現代ロシア映画のプロパガンダを再考する」

2022年2月以降、ロシアの文化コンテンツは同国のプロパガンダとして世界各国で認識が改められ、特にウクライナでは侵略国のツールの一つとしてすでに浸透していたものも含め排除が進んだ。本報告ではロシア映画の場合として、主に独立から現在に至るまでのウクライナで製作された露宇合作映画に注目し、俳優の選択や興行収入に反映した観客の嗜好を指標として、ロシア映画はプロパガンダの役割をどの程度担っていたのかについて改めて考察する。

高橋沙奈美「ロシア正教会における反戦聖職者の動向——国外逃亡と支援の現状」

ロシア正教会指導部はウクライナ全面侵攻を積極的に支持している。反戦的あるいは平和主義的と取られる言動を表明する聖職者は、ことごとく厳しい処分を受け、ロシア国内では実質的に生き残ることが難しい状況になっている。本報告では国外へ逃亡した反戦聖職者の具体的事例と、彼らに対する支援

について紹介する。

立石洋子「文化政策と歴史像」

本報告では、ロシアの文化政策を歴史の評価という観点から検討する。対象とする時期は 2014 年を中心としながら、歴史の評価をめぐってウクライナなど他国の政府との対立が目立つようになった 2000 年代後半から 2021 年頃までの変化も含める。この期間に形成された国家の政策が歴史家の議論にどのように反映されたのかを、とくに議論を集めた論点や、他国の歴史家との共同研究の試みなどに注目しながら明らかにしたい。

奈倉有里「ロシアの文化・教育にまつわる法の現在」

2022 年以降のロシアにおいて、文化や教育の権利にかかわる法——教育制度、徴兵制、言論統制などにまつわる法は、どのように変わってきたのか。今回の発表では、エカテリーナ・シュリマンの見解を中心に、近代的な形式を装いながらも実質的には国家の暴力を正当化する装置となっている現代ロシア内政の法制度を確認し、その建前と施行の実態を検証する。

八木君人：司会兼コメンテーター

日本ロシア文学会活動記録（2024～2025）

1. 2024年度（第74回）大会

第74回定例総会・研究発表会は2024年10月26日（土）、10月27日（日）の両日、創価大学で開催された。

これにともない理事会は10月26日（土）に、各種委員会は10月27日（日）に個別に開かれた。また日本ロシア文学会大賞授賞式が総会中に行われ、受賞記念講演録画はYouTube上で一般公開されている。また懇親会が、26日の午後にニュープリンスホールで行われた。

10月26日（土）

午前 開会式、研究発表会

午後 研究発表会、定例総会、懇親会

10月27日（日）

午前 研究発表会

2. 研究発表会内容

研究発表

第1会場

10月26日（土）午前（ブロック①）

〔司会〕三好 俊介、前田 和泉

A01 沖 隼斗：無謀な企て ボリス・ポプラフスキイとイリヤ・ズダネーヴィチ

A02 栗原 かおり：マリーナ・ツヴェターエワの詩集『別れ』における自己神話化の手法——連作詩「別れ」およびボエマ「赤い馬に乗って」の分析

10月26日（土）午前（ブロック④）

〔司会〕佐藤 千登勢、貝澤 哉

C02 松元 晶：「調和」するタシケント：「タシケント・テーマ」映画におけるタシケント表象

A06 宮 将仁：これから先何を書くべきか？：フォルマリズム・生産主義における労働とビット

10月26日（土）午後（ブロック⑦）

〔司会〕熊野谷 葉子、澤田 和彦

C04 柚木 かおり：ウクライナのコブザ文化における奏者ギルド：過去と現在

C05 一柳 富美子：戦後日本の学校教育におけるロシア・ソヴィエト音楽受容：鑑賞教材研究を通して

C06 宮崎 衣澄：明治期日本正教会の石版画アイコン

10月27日（日）午前（ブロック⑩）

〔司会〕鳥山 祐介、伊東 一郎

A14 平嶋 寛大：F. C. スコヴォロダー『魂の静寂に関するブルタルコスの解説』におけるキリスト教的価値観の反映

A15 飯濱 碧輝：哀歌における「時のはかなさ」のモチーフの発展から見たデルジャーヴィン「メシチェルスキイ公の死に寄せて」の文体の革新性

第2会場

10月26日（土）午前（ブロック②）

〔司会〕野中 進、プロホロワ マリア

A03 ЧИАН Чиэх Хан: «У тебя очень смешная рожа...»: Смех и нигилизм в драме Леонида Андреева «Савва»

C01 ЛИТОВСКАЯ Елизавета: #Ruslit: Русская классика глазами пользователей соцсетей

10月26日（土）午前（ブロック⑤）

〔司会〕古賀 義顕、金子 百合子

B01 光井 明日香：現代ロシア語における女性化名詞の使用をめぐる

B02 渡部 直也：ウクライナ語の音声・音韻的バリエーション：学習・教育の観点から

10月26日（土）午後（ブロック⑧）

〔司会〕武田 昭文、グレチュコ ヴァレリー

A08 СЮН Цзун-Хуэй (Серафима): Дискурсивная стратегия в манифестах акмеизм

A09 ЯНЬ Дин-цзя: В поисках ключа к «Мирсконце» Велимира Хлебникова

A10 金丸 駿：ニコライ・ザボロツキイ『ストルプツィ』における生理学的形象：ミハイル・ゼンケーヴィチの書評を手掛かりに

10月27日（日）午前（ブロック⑪）

〔コーディネーター・コメンテーター〕中堀 正洋

W01 塚崎 今日子、熊野谷 葉子、山田 徹也：現地調査資料に基づく伝承文化の総合的記述の試み：北ロシアフォークロア調査の事例より

第3会場

10月26日（土）午前（ブロック③）

〔司会〕原 真咲、越野 剛

A04 上村 正之：コトリャレフスキー作『エネイダ』の後半部分とロシア文学の接点——デカプリスト作家に注目して

A05 大谷 梨乃：オレシ・ドンチェンコ『カラフト』におけるイデオロギーとナショナリティ

10月26日（土）午前（ブロック⑥）

〔司会〕平松 潤奈、清水 俊行

C03 高橋 沙奈美：戦いを聖化する——ロシア・ウクライナ戦争と「市民宗教」としての正教会

A07 町田 航大：ドストエフスキー「プーシキン演説」におけるリベラルなメシアニズム

10月26日（土）午後（ブロック⑨）

〔司会〕齋須 直人、木寺 律子

A11 永田 怜絵：ドストエフスキー『弱い心』における心の描かれ方

A12 清水 真伍：ドストエフスキーの芸術哲学における人間学的側面

A13 坂下 将人：Ф.М.ドストエフスキー『悪霊』原題をめぐって：言語学および神学的考察

10月27日（日）午前（ブロック⑫）

〔司会〕斎藤 毅、宮川 絹代

A16 李 博聞：アンネンスキーの詩学における「印象派的」な世界認識と「心理構成的」な詩作方法：手稿「詩人へ」を中心に

A17 松山 勝哉：А・クプリーンとИ・ブーニンの後期創作における「私」と「プロット」の問題について

第10回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月26日（土）15:45-16:45 創価大学 中央教育棟 AB103
亀山郁夫：「黙過」と想像力 ロシア文学との60年を回顧する

3. 総会議事録要旨（*詳細な総会報告は会報55号記載）

2024年10月26日（土）16:50-18:10

(1) 開会の辞 会長：中村唯史（敬称略、以下同様）

(2) 学会賞表彰 【論文部門】堤縁華

【著書部門】安野直

【選考委員会特別賞】高橋沙奈美

(3) 日本ロシア文学会大賞表彰

(4) 若手ワークショップ企画表彰

「時の脱臼：スラヴ・ユーラシアの文学・芸術にお

アナクロニズム

ける 錯 時 性」(代表者：堤緑華)

- (5) 議長団選出：安野直（関東東北）、菅井健太（北海道）、笹山啓（関西中部）
- (6) 事務局報告
- (7) 各種委員会報告
- (8) 2023/2024 会計年度決算および会計監査報告
- (9) 2024/2025 会計年度予算案
- (10) 75周年記念行事について
- (11) 2025 年度全国大会について
- (12) 会則・諸規定のロシア語訳改訂について
- (13) 2024/2025 年度役員・理事・各種委員一覧
- (14) 議長団解任・閉会の辞 副会長：前田和泉

4. 会員異動（2024 年 8 月～2025 年 7 月）

ご逝去

井桁貞義様（関東東北）、藤本和貴夫様（関西中部）、
法橋和彦様（関西中部）、柳富子様（関東東北）
ご冥福をお祈りいたします

退会（以下、敬称略）

安達紀子（関東東北）、池田和彦（関東東北）、
宇佐見多佳子（北海道）、梅村博昭（北海道）、
柿添琳子（関東東北）、西角美咲（関東東北）、
林由貴（関東東北）

入会（一般会員）

衛藤萌子（えとう・もえこ）（関東東北）、
カドチニコフ・ヤコブ（関東東北）、
河城瑞季（こうじょう・みずき）（関東東北）、
小手川将（こてがわ・しょう）（関東東北）、
千葉雄（ちば・ゆう）（関東東北）、
浜渦理起（はまうず・りき）（関東東北）、
早川萌（はやかわ・めい）（関東東北）、
林ゆかり（はやし・ゆかり）（関東東北）、
真島亮吉（まじま・りょうきち）（関東東北）、
山本悠介（やまもと・ゆうすけ）（関西中部）

入会（学生会員）

池田航輝（いけだ・こうき）（北海道）、
伊藤学（いとう・まなぶ）（北海道）、
小嶋冴（こじま・さえ）（関東東北）

賛助会費納入

株式会社三省堂、日本ロシア語情報図書館、
ナウカ・ジャパン合同会社、国際親善交流センター
(JIC)、ロシア旅行社

維持会費納入

川崎浹（2 口）、国松夏紀、栗原成郎

日本ロシア文学会
2023/2024 会計年度決算報告(2023 年 9 月 1 日～2024 年 8 月 31 日)
2024/2025 会計年度予算案(2024 年 9 月 1 日～2025 年 8 月 31 日)
(2024 年 10 月 26 日総会承認)

I 一般会計

収入の部	前年度予算 (2023/2024)	前年度決算 (2023/2024)	今年度予算 (2024/2025)	備考
前年度からの繰越金	¥8,532,911	¥8,532,911	¥8,042,030	
利息	15	-27	15	
学会費	3,000,000	2,458,000	2,500,000	
入会金	10,000	13,000	10,000	
賛助会費	100,000	60,000	100,000	
雑収入(広告)	20,000	21,000	20,000	
特別収入	0	10,000	0	繰越金を除いた今年度収入:
合計	¥11,662,926	¥11,094,884	¥10,672,045	¥2,630,015

支出の部	前年度予算 (2023/2024)	前年度決算 (2023/2024)	今年度予算 (2024/2025)	備考
大会準備費	¥400,000	¥248,994	¥400,000	創価大学大会
学会誌制作費	950,000	785,357	1,600,000	学会誌+75 周年記念誌
交通費	700,000	827,926	1,000,000	理事会、75 周年インタビュー
事務委託料	730,000	669,346	700,000	シクミネット+勝美印刷
事務費	20,000	30,215	140,000	会報郵送+会長選電子投票
広報委員会	16,000	17,160	140,000	サーバー代+謝礼 4 年分
マブリヤール会費	60,000	0	90,000	US\$1=¥150、3 年度分想定
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞・大賞	100,000	108,556	140,000	学会賞 2+1 名、大賞 1 名
通信費	15,000	10,553	15,000	
印刷費	200,000	232,241	250,000	大会資料集(選挙電子化)
会合費	2,000	3,240	5,000	
事業費	50,000	0	50,000	75 周年文字起こし他
シクミネット手数料	60,000	89,266	100,000	
(小計)	¥3,333,000	¥3,052,854	¥4,660,000	2024-25 年度支出予定
予備費	7,339,045	0	6,012,045	
次年度への繰越金		8,042,030		
合計	¥11,662,926	¥11,094,884	¥10,672,045	

Ⅱ 特別会計

収入の部	前年度予算 (2023/2024)	前年度決算 (2023/2024)	今年度予算 (2024/2025)	備考
前年度からの繰越金	¥2,984,125	¥2,984,125	¥3,401,125	
維持会費	100,000	60,000	100,000	
合計	0	500,000	0	
	¥3,084,125	¥3,544,125	¥3,501,125	
支出の部	前年度予算 (2023/2024)	前年度決算 (2023/2024)	今年度予算 (2024/2025)	備考
事業費	¥250,000	¥65,000	¥400,000	国際交流*1・若手企画
学会参加者旅費補助	80,000	78,000	60,000	旅費補助申請 3 名
託児費用補助			50,000	2024-25 年度新設
小計	330,000	143,000	510,000	
予備費	2,754,125	0	2,991,125	
次年度への繰越金		3,401,125		
合計	¥3,084,125	¥3,544,125	¥3,501,125	

(2024年監査報告 監事：三浦清美 (9月27日)、村田真一 (10月3日))

委員会活動記録

■ 日本ロシア文学会大賞選考委員会

野中 進

昨年度の総会で改訂された実施細則に基づき、2025 年 1 月末を一般推薦の締切とし、その後、2 週間、大賞選考委員による追加推薦の期間を設けた。その結果、一般推薦は 2 件、追加推薦は 0 件であった。3 月 5 日、オンラインで大賞選考委員会を開催し、上記 2 件の推薦について審議した末、大賞候補者として沼野恭子氏（東京外国語大学名誉教授）を推挙することを決めた。委員会案は 7 月 13 日の理事会で全会一致で承認された。選考理由については『ロシア語ロシア文学研究』57 号をご覧ください。沼野氏による大会受賞記念講演は今年の全国大会（於東京大学駒場キャンパス）で行われる。奮ってご参加ください。

■ 学会賞選考委員会

安達 大輔

学会賞選考委員会は 2024 年 12 月から 2025 年 7 月にかけて選考作業を行った。2025 年 7 月 2 日に Zoom meeting にて選考委員会を開催し、審議の結果を理事会で報告したが、そこでの協議を受けて、選考委員会で再度話し合いを行い、著書部門・論文部門ともに該当なしという結論に至った。選考過程などについて、詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第 57 号を参照されたい。

■ 学会誌編集委員会

平松 潤奈

『ロシア語ロシア文学研究』57 号（2025 年 10 月刊行予定）の編集作業は、現在のところ順調に進んでいます。学会誌 56 号については、24 年 12 月に論文と書評を J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/yaar/list/-char/ja>) で、25 年 7 月に 56 号全体を学会ホームページ上で公開しました（後者については、例年より公開が大幅に遅れたことをお詫び申し上げます）。57 号についても、刊行後、両サイトでの公開を予定しています。編集作業にご協力いただいている多くの学会員の方々に、心よりお礼申し上げます。

■ 広報委員会

本田 晃子

広報委員会では学会ホームページおよび学会メーリングリストの管理・運営を行っています。ホームページについては、直近 1 年間で約 103 件（前年 99 年）の更新を行いました。メーリングリストによる学会からのお知らせについては、直近 1 年間で約 123 件（前年 103 件）の配信を行いました。引き続き、ホームページについてのご意見・ご要望がありましたら、広報委員会までお知らせください。ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 国際交流委員会

武田 昭文

1. 国際交流助成（2023 年 6 月～2025 年 5 月分）について、「国際学会等での報告に関する助成」に 3 名の申請があった。全員が助成対象の要件を満たしていることを確認し、旅費 50,000 円の助成を行うことを決定した。

2. 「国際参加枠」による海外からの報告者の申請を 6 月 30 日締切として募集した。今年度は 6 名の応募者があり採用となった。

3. 海外で開かれる国際学会・シンポジウム・セミナー等の情報について、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせください。

■ 社会連携委員会

鴻野 わか菜

社会連携委員会では、JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール（2025 年 8 月 28 日-29 日 主催：JCREES、共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）の企画選考に関わりしました。本サマースクールには、例年、JCREES 加盟学会より 1 名ずつ講師を派遣しています。今年は高柳聡子氏が講師を、鳥山祐介氏が企画選考委員をお引き受けくださいました。

また、2024 年度日本ロシア文学会公開講演会として、安野直氏、堤縁華氏、高橋沙奈美氏の講演の動画を公開しました。

ご協力くださった皆様に御礼申し上げます。

■ 倫理委員会

佐藤 千登勢

本委員会が担当する案件は今年度はなかった。

支部活動記録

■ 北海道支部

1. 2025 年度研究発表会・総会
(2025 年 7 月 6 日 (土) 11:00~16:45、北海道大学、対面・zoom のハイフレックス開催、研究発表会とラウンドテーブルは支部以外の会員にも zoom でライブ配信)
 - ✧ 研究発表会 (11:00~14:45)
 - ・ 池田航輝「チャイコフスキイの交響曲再考:「民謡」に着目して」(司会:大西郁夫)
 - ・ 伊藤学(北海道大学・院)「翻弄のなかで変貌を遂げる女性:ミハイル・アルツィパーシェフ『真ん中に立つ女』における主人公をめぐる」(司会:岩本和久)
 - ・ 宮内拓也(北海道大学)、福田悠朗(北海道大学・院)「ロシア語における副詞の分類と副詞句の左端移動について」(司会:鈴木理奈)
 - ・ 藤田智子「シャガールのロシア語」(司会:大武由紀子)
 - ・ 岩原宏子「『銀の時代』のロシア人形劇」(司会:安達大輔)
 - ✧ ラウンドテーブル (15:00~16:10)
『ロシア中東欧のエコクリティシズム スラヴ文学と環境問題の諸相』:文学研究と「環境問題」をめぐる
小椋彩(北海道大学)、中村唯史(京都大学)、越野剛(慶應義塾大学)、安達大輔(北海道大学)
 - ✧ 総会 (16:15~16:45)
 - ・ 議題:1. 2024 年度活動報告(理事会、及び北海道支部)、2. 2024 年度会計報告、3.北海道支部役員体制について、4.その他
 - ・ 運営委員会 (12:15~13:00)
 2. 今期の体制
 - ✧ 支部長:岩原宏子
理事:岩本和久
事務局長:菅井健太
 - ✧ 支部会新役員(2025 年 10 月全国大会総会後)
支部長:岩本和久
理事:安達大輔
事務局長:菅井健太
- 事務局住所:060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目 北海道大学文学部 菅井研究室気付
Tel:011-706-3050 E-mail: ksugai@let.hokudai.ac.jp

■ 関東東北支部

1. 『関東東北支部報』43 号発行(2025 年 5 月)
2. 関東東北支部の共催による日本ロシア文学会 75 周年記念のイベントとして、2025 年 2 月 1 日(土)に東京大学本郷キャンパス法文 2 号館 1 番大教室にて、アントン・ドーリン氏講演会「逃走と沈黙——ロシア映画と戦争——」(モデレーター:守屋愛)を開催した。
3. 2025 年度研究発表会・総会(2025 年 6 月 7 日(土)、東京大学本郷キャンパス(対面)とオンライン(Zoom)を併用)
 - ✧ 研究発表会
[修士論文成果報告部門]
 - ・ 林 ゆかり(早大院)「転形期のシクロフスキー——

- 『第三工場』における「加工」と「芸術の自由」の意義をめぐる」司会:佐藤千登勢(法大)
 - ・ 片貝 里桜(東外大院修了)「身体をめぐる暴力と抑圧の表現——芸術家イリーナ・ナーホヴァの創作から」司会:生熊 源一(早大)
 - ・ 衛藤 萌子(早大院)「病・露出・モンタージュ——キーラ・ムラートワ『無気力シンドローム』の編集美学について」司会:梶山 祐治(筑波大)
 - ・ 酒井 外貴(東外大院)「ロシア語の数量詞の範疇をめぐる諸問題——分割文と遊離構文の分析を中心として」司会:井上 幸義(上智大)
 - ・ 佐野 元昭-昭代(東大院)「19 世紀後半カフカース地域に於けるロシア人女性エリートの帝國的認識・表象・実践」司会:五月女 颯(筑波大)
 - ・ 河城 瑞季(早大院)「(他者)の不意打ち——到達不可能性をめぐるアンドレイ・タルコフスキー『ストーカー』論」司会:斎藤 毅(大妻女子大他)
 - ・ 浜渦 理起(東大院)「スターリン期ソユーズムリトフィルム作品における自然表象——ナショナリズムとの関わりを中心に」司会:長谷川 章(秋田大)
- [博士論文成果報告部門]
- ・ 池澤 匠(学振特別研究員-PD)「マイダンのウクライナにおける言語の表象・言説・イデオロギー」司会:村田 真一(上智大)
- ✧ 総会
 - ① 報告事項
 - ・ 2024 年度会計報告
 - ・ 2024 年度支部活動概要
 - 1) 2024 年 5 月『関東東北支部報』第 42 号刊行。
 - 2) 2024 年 6 月 1 日に関東東北支部研究発表会・総会、第 1 回運営委員会(2025 年 3 月)開催。運営委員会では、下記の総会の報告・審議事項のほか各大学の 2024 年度のロシア語履修者数、専門コースへの新旧者数、ロシア以外でロシア語が学べる留学先やその現状について情報共有・意見交換が行われた旨報告があった。
 - 3) 関東東北支部会員向けメーリングリストの運用を開始した。
 - 4) 関東東北支部の共催による日本ロシア文学会 75 周年記念のイベント、アントン・ドーリン氏講演会「逃走と沈黙——ロシア映画と戦争——」(モデレーター:守屋愛)開催について報告を行った。引き続き運営委員会にてイベントの内容について審議を行うことになった。
 - 5) 事務局長が大森雅子(千葉大学)から古宮路子(東京外国語大学)にかわり、事務局が東京外国語大学へ移転した。2025 年度から郵便局の依頼に即して、規約に事務局の住所を記載し、事務局が移転する際は支部のメーリングリストで規約変更の承認作業を行うことが報告された(今回の事務局交代に際しても、2025 年 4 月にメーリングリストで規約への事務局住所記載に関する規約変更について提案・承認された)。
- ② 審議事項
 - 1) 電子投票の導入について:2025 年の関東東北支部選出理事候補選からグラント e 投票に業務を委託することが提案され、メールアドレスの登録がない支部会員については、従来通り、投票用紙一式を郵送することを含め、承認された。
 - 2) 選挙管理委員会として原案どおり梶彩子、宮川絹代、安野直(委員長)(五十音順・敬称略)の三名が選

出された。

- 3) 支部会費の徴収停止：支部の会費残高が、当面の活動を維持するのに十分確保できていることから支部会費の徴収を一時的に停止する（会費徴収の再開のタイミングについては、毎年、年度末の運営委員会で検討を行い、活動に支障のないようにする）ことが提案され、承認された。2025年度以降の会費の納入を済ませている会員については不平等が生じないように、事務局より該当者に対して、返還の希望の有無を確認することになった。
4. 今期の体制
支部長：楯岡求美
事務局長：古宮路子
事務局住所：〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学古宮路子研究室
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

■ 関西中部支部

1. 2024/2025 年度『日本ロシア文学会関西中部支部会報』発行（2024年9月18日刊）
2. 関西中部支部新支部長ならびに理事候補選挙（投票期間 2025年5月12日～5月25日、電子投票／郵送）
3. 運営委員会（2025年6月21日（土）13：00～14：00）
 - ・ 総会審議事項に関する事務局案の審議・承認
 - ・ 支部の会費・入会費の当面不徴収の継続について審議・承認
4. 2025年度研究発表会・総会：2025年6月21日（日）14：00～17：10 中京大学名古屋キャンパス（対面）＋オンライン（Zoom）によるハイブリッド開催
 - ◇ 研究発表
 - ・ 山本悠介（神戸外大院）「リムスキー＝コルサコフの異教史像：『三部作』における自然との距離感から」（司会：北見諭）
 - ・ テン・ヴェニアミン（京産大）「G.ポメラントフのドストエフスキー解釈：パフチンの「ポリフォニー」、
「カーニヴァル」概念との比較を通じて」（司会：木寺律子）
 - ・ 高田映介（神大）「チェーホフ『三年』における風景画の役割について」（司会：斎須直人）
 - ◇ 総会
①会員異動報告、②関西中部支部新支部長ならびに理事候補の選挙結果報告および役員候補につき審議・承認、③2024年度活動報告、④2024年度決算案の審議・承認、⑤2025年度予算案の審議・承認、⑥次期監事の審議・承認、⑦「日本ロシア文学会関西中部支部会則」の改正について審議・承認、⑧「日本ロシア文学会関西中部支部役員選任規定」の改正について審議・承認、⑨「日本ロシア文学会関西中部支部役員選任規定」における役員免除の条件について審議（継続審議）、⑩支部会費・入会費の当面不徴収の継続について報告、⑪理事会報告、⑫2026年度研究発表会・総会当番校（京都産業大学・ハイブリッド開催）
5. 今期の体制
支部長：金子百合子
事務局長：藤原潤子
事務局住所：〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学藤原潤子研究室 気付
E-mail: junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

■ 西日本支部

1. 2025年度研究発表会・総会（9月13日（土）、九州大学西新プラザ）
 - ◇ 研究発表会
 - ・ 高橋沙奈美（九州大学）「上海の主教イオアン足跡をたどる—100年前のメッセージ」
 - ◇ 総会
議題 支部会の今後の活動について
2. 今期の体制
支部長・事務局長：佐藤正則
事務局住所：〒819-0395 福岡市西区元岡 744 九州大学
大学院言語文化研究院佐藤正則研究室 気付

日本ロシア文学会 第75回大会資料集

2025年9月25日発行

発行者 日本ロシア文学会 中村唯史
〔書記〕

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
北井聡子研究室内

〔庶務会計〕

〒930-8555

富山県富山市五福 3190

富山大学五福キャンパス人文学部校舎 320
笹山啓研究室内

E-mail（共通）：yaar@yaar.jpn.org

URL: <http://yaar.jpn.org/>

〔大会組織委員会〕坂庭淳史（委員長）、
小椋彩、寒河江光徳、武田昭文、鳥山祐介、
堀口大樹

〔大会実行委員会〕鳥山祐介（委員長）、
北井聡子、畔柳千明、楯岡求美、乗松亨平、
細川瑠璃、丸山由紀子

★ロシア音楽史、オペラ史研究の必携資料

M.M.ゴドレフスカヤ編

**ロシアのオペラ初演 1730～
1960 年 全2巻 第1巻 A-Л**

**Первые оперные постановки в
России. 1730-1960. В 2 т. Т.1: От
буквы А до буквы Л.**

М., «Артист. Режиссер. Театр». 2025 г., 374 с.
R269829 ¥18,040

★出版史上初の本文批判を経た確定テキスト版

**アカデミー版 ショーロホフ著作集
全8巻**

**Академическое собрание
сочинений. В 8 т.**

М., «Молодая гвардия». 2025 г. 3648 с..
R270605 ¥92,730

ナウカ・ジャパン

店舗 10:00-19:00(月～金)
11:00-18:00(土)、日祝休

★代表的ゴーゴリ研究者による研究の集大成

イーゴリ・ヴィノグラードフ著

ゴーゴリ百科事典 全7巻

第1巻 A-Ж

**Виноградов И.А. – Гоголевская
энциклопедия. В 7 т. Т.1 А-Ж.**

М., ИМЛИ РАН; <Река времён>. 2024 г., 1024 с.
R268690-8552 ¥11,500

★キエフ・ルーシから 1930 年代前半まで

サラビヤノフ親子 著

ロシア絵画ガイドブック 全3巻

Путеводитель по русской живописи.

Конец X – первая треть XX. В 3 т.

М., «Искусство-XXI век». 2024 г., 1088 с.
R267875 ¥59,620

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-34

TEL 03-3219-0155, FAX 03-3219-0158

book@naukajapan.jp

https://www.naukajapan.jp

◆同時代人の見た1882年全露芸術・産業博覧会 Архангельская И. Д.
- Всероссийская выставка 1882 года в Москве глазами
современников. "Придется ли еще когда-нибудь вернуться...М.:
Кучково поле Музеон, 2025. 304 с. (S3283) 税込価格 ¥20,900

◆雪のなかのユートピア シベリアの社会建築実験(1910-1930年代)
Атапин И. - Утопия в снегах. Социально-архитектурные
эксперименты в Сибири, 1910-1930-е. М.: GARAGE, 2025. 264 с.
(S3261) 税込価格 ¥8,580

◆キム・オンホ: ソウルからサンクトペテルブルクまでの本屋の大旅行
Ким О. - Книжные магазины: большое путешествие от Сеула до
Санкт-Петербурга. М.: Манн, Иванов и Фербер, 2025. 512 с.
(S3358) 税込価格 ¥22,000

◆ヴラデーミル・コナシエーヴィチ: 日記・論文・伝記資料 Кошачев В.
М. - Дневники. Статьи разных лет. Материалы к биографии
художника. М.: Красный пароход, 2025. 352 с. (S3117) 税込価格
¥26,400

◆レンズに捉えられたセルゲイ・ドヴラートフのレニングラード(1960-
1970年代) Ленинград Сергея Довлатова в объективе фотокамеры.
(Больше чем книга). СПб.: Азбука; Азбука-Аттикус, 2025. 304 с.
(S3593) 税込価格 ¥19,800

◆レオニート・マクシメンコフ: ショスタコーヴィチ伝 Максименков Л. -
Шостакович. Маршал советской музыки. (Серия: Портрет на фоне
эпохи). М.: Вече, 2025. 480 с. (S3080) 税込価格 ¥8,800

◆ヴェーラ・ミトゥーリッチ=フレーブニコヴァ: フレーブニコフ家年代記
Митурич-Хлебникова В. М. - Облака. Хлебниковы: хроника семьи.
М.: Арт Волхонка, 2025. 632 с. (S3424) 税込価格 ¥26,400

◆1920-1940 年代 ソヴィエト・シュルレアリズム Плуныян Н.,
Селиванова А. - Сюрреализм в стране большевиков. М.: GARAGE,
2025. 216 с. (S3282) 税込価格 ¥9,460

◆サロン・ドトヌ(1905)におけるフォヴィスムとフランス前衛芸術の登
場と20世紀初頭ロシア芸術におけるその継承 Русские дикие: каталог
выставок. М.: Музей русского импрессионизма, 2025. 264 с.
(S3699) 税込価格 ¥22,000

◆ダニイル・ハルムス生誕120年記念展覧会カタログ Хармс и
компания. 120-летию со дня рождения Даниила Хармса. Каталог
выставки. СПб.: Kgallery; Вита Нова, 2025. 320 с. (S3421) 税込価格
¥39,600

◆マイ・ミトゥーリチ生誕100年展 Май Митурич - К мысу радости. М.:
Третьяковская галерея, 2025. 296 с. (S3664) 税込価格 ¥44,000

◆モスクワの女性たち(1920-1930年代) Гусева К., Плуныян Н. -
Москвичка. Женщины советской столицы 1920-1930-х. М.: Кучково
поле Музеон, 2025. 332 с. (S3535) 税込価格 ¥22,000

◆ロシア民族衣装とサラファン Русский костюм с сарафаном.
Традиции и трансформации. М.: Бослен, 2025. 256 с. (S3731) 税込
価格 ¥15,400

日ソのホームページ(<http://www.nisso.net>)ではロシア
の新刊書、新聞・雑誌、美術アルバムのコーナーの他に、約
80,000点のロシアの書籍のキーワード検索が可能です

(株)日ソ

東京・大阪・モスクワ

〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-4本郷小林ビル

Tel.03-3811-6481 Fax03-3811-5160

E-Mail: nisso@nisso.net